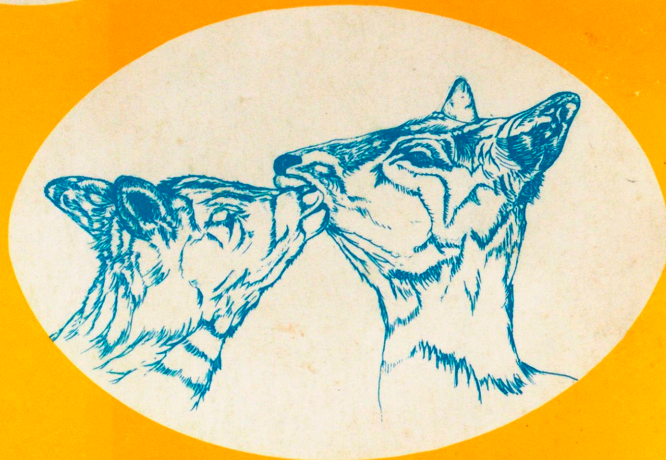


ふじみの



No. 20 1981

東京農大畜友会

巻頭言

畜友会委員長 小 椋 勇 人

受けとめる器の大きさにより、おのずと人が集い、人の輪が広がる様な畜友会であることが私の願いであった。

“人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵”

私は役員時代酒を飲みかわすたびにこの詩を口づさんだものである。人の心を得ることはどんな堅固な城にもまさり、情けは味方を作り、非道は敵を作るといわれている。人の心を得ることは決してやさしいことではない。

畜友会もグラウンドの片端の古びた会室から、りっぱな常盤松会館に移り、今では昔の畜友会の姿を見出すことはできなくなった。しかしどんなにりっぱな城に移り変わろうと、みせかけの城であってはならない。

この詩のように人の心を得ることができた時始めて、歴史に恥ないりっぱな畜友会というりっぱな城が築き上げられると思う。

これからも畜友会の発展を節に願う。

ふじみの 第20号

目次

巻頭言	畜友会委員長 小椋 勇人	1
御一報		
考えること	畜産学科長 鬼原 新之丞	4
学友と友情	教授 鈴木 正三	6
農学と農業	教授 吉村 喜彦	8
農場だより		
サイロ倒壊事故	講師 大谷 伸一	10
学生時代	講師 鈴木 忠	13
特別寄稿		
当世学生気質論	(社)家畜改良事業団 印牧 美佐生	16
肉牛経営の基本と理念	鈴木 鈴木 雅正	18
或る農民の主張	JAL(ジャパンアピールキャンプ) 永田 信	20
海外だより	畜友会講演会から	
中国を旅して	助教授 石島 芳郎	22
台湾からの便り	助教授 曾野 徳昌	27
北海道別海町から	別海町 角川 義捷	29
私と別海の四季	畜産一年 穴戸 寿	31
北海道実習記	畜産二年 深沢 糾	33
別海町実習記		
サークルレポート	酪農経営をめざして 牛飼いの会	35
詩・随筆		
優秀卒論紹介	牛の雄性生殖器に関する基礎的研究 54年度卒 本間 健郎	41
研究室だより		
昭和五十五年卒業論文題目		
。家畜種学研究室	家畜生理学研究室	44
。家畜衛生学研究室	家畜繁殖学研究室	45
。畜産経営学研究室	畜産物利用学(肉)研究室	47
。家畜飼養学研究室	畜産物利用学(乳)研究室	49
畜友会だより		
昭和五十五年畜友会行事報告		58
昭和五十五年畜友会会計報告		59
第八十八回収穫祭畜産学科会計報告		60
第八十八回収穫祭報告		62
昭和五十五年第八十八回収穫祭役員・畜友会役員		63
畜友会規約		64
編集後記		69

考えること

畜産学科長 鬼原新之丞

人間の創ってきた文化は「考えること」によって今迄進歩して来たものである。幼児はやがて言葉を知り、成長するに従い両親とか家族とか近隣社会、幼稚園から中高の各学校と、それにつらなるもろもろの場所で教えられ育てられて、大学に入る頃までに相当の物知り、または物を考えることの出来るようになってくる。殆んどかりものだとは気がつかず、自分一人で生れて育ってきたような錯覚で胸を張る。このように一つの思想や、ある考え方はやはり知っている言葉が組立てられて、その個々の考え方や考えそのものにもなる。色々の言葉や事柄が組合っているうちにそこから新しい創造が生れる。大学生は教養、専門技術の統一体としての人間像を、自らの力で開発し創造する市民社会での候補者と考えられているが、しかし一方には大学生生活をも包含した社会への不応性を示す学生諸君もまた多くなりつつある。この不応性には、2つの方向があるように考えられる。1つは不応性から反省へ、そして生活訓練へと進まず内省が内罰的な苦悩となって、自己への不信へと、思考的判断の低さを辿り左から内閉的神経症に陥いつて行く学生達、もう一つは、自己を忘れ、ひたすら受験文化への奉仕者として、社会の動態の中で友情や孤独に耐えることなどから遠ざかって、比較し合い競争することのみが喜

びであり、優位感に浸り、ついにはそのために劣位感にも陥いる学生達、このような自我を見失なった学生諸君は、一定年令の時に、その時代に必要な社会的訓練を受けていなかったり、社会への正しい判断への確立する方向に向いていなかったり、民主社会を創るための忍耐強さがなかったり、反省から対策前進と言った外へと内へのバランスが欠けたり、またその一方だけが発達したためであろう。すなわち自我の確立してきていない大学生、試験用の知識偏重大学生諸君は、また一、二の偏行指導者の意見の方向に統一され安く、流行にすぐ動揺したりするのである。大学生は孤独な自己の中で自我を自己の力で発見し、正しい学生生活の意義を考えながら自我を確立して行かねばならないと考える。さて我国においては、最近いろいろな方面で過当競争が激烈化しているが、最近の欧州においては、EECの思想が世界を風靡している。その理念は、個人も国家もそれぞれの長所を十分發揮し、相互扶助の精神で貢献することであって、その根底には *Personality* の尊重であろうと考える。アメリカにおいても *Humanity, Personly, Vitality* の3つが教育の今後の大きな眼目と考えられている。畜産人を目ざす諸君は、畜産に対する「認知の欲望」「飼料自給に対する欲望」「品質の良い畜産物を生産する欲望」「生産物の安全性に対する欲望」これらの欲望を十分満たすため大なる努力をして戴きたい、特にこの中で安全性に対する欲望は現在の日本社会においては大きな比重が占められている。わが国の一般大衆は畜産業界に現時点において、何を最も要求しているであろうか、この大衆の社会的欲望に応答するためには、いったいどのような方法で、どのような順序で解決すればよいが、国際的視野に立って各自が考えなければならない時期に直面していると考ええる。諸君の自我の完成と、畜産人としての完成を心から期待している。

学友と友情

教授 鈴木正三

農大入学式に新入生に与える学長の言葉に学生生活の指針の一つとして「良き友」を得る様にと、これが人生における大学時代の一つの大きい収穫であることを学生諸君も記憶していることと思う。高度の技術の習得・高潔な人格の形成そして良き伴侶となる学友を得ること、正に大学生活を送る青年学徒の目的であり、特権である。在学当時はややもすると学友の味のよさ、有難さはそれほど身にしみてピンと感じないかも知れない。しかしそれが卒業して北に南に、大きく世界に羽ばたく時、必ずや時の如何んを問わず、偲びよる学友との想い出それが郷愁となってつきまとして来ることは何人も体験することである。それほど学友、友達或は往時の戦友というものは尊い存在である。従ってそれが学生時代の大きい財産となり、動力となって諸君の人生をしっかり守って参れ、人生の活躍への大きい資源となる。誠に友達・学友は大切なものである。それが為学友を選ぶ場合は慎重に熟慮せねばならない。一時的にして方便的な平面選

択は悔いを千載に遺す。ところが斯様なその平易なその場限りの選び方をしていて嫌いが多々見受けられる。よく言われている様にもとより喜びを分かち合い、悲しみを共にする重要な存在である。学生諸君は筆者のこの極めて平易として当然すぎることを今更こと新しく書き貫くことを笑って老婆心と読み捨ることと思う。確かに先人の教訓的言葉を借りて駄足の表現を筆者もどうかと思う。しかしここに敢えて書くことは文字通り老婆心ながらの学友を選ぶ重要性について学生諸君に訴え注意を喚起したいからである。どうぞ立派な友を選んで悔いなき幸福な人生を送ってもらいたい。

このことが全く同じ様に研究生生活を続ける所謂学者にも当然ながら人間社会に生きる限り同じ道を歩む友人がいる筈である。またいなければならぬ。例外を除いて一人で追求する道への完成を期することの困難さは筆者の短かい過去から充分承知している。その友人が国の内外を問わず、世界どこの国の学者でも差別なく選んでよいことは当然のことである。外国となると測り知れない多くの事情・要因が complex になって来ることも当然であろう。しかし自己の同じ途を辿る者は学者の世界では如何なる complexity があってもこれを強力に排除して良き友を得て真理を求め学問に挑戦することこそ学究者の真の姿と信ずる。これまた当然の事象をここに

駄筆することはそれなりに筆者としての理由がある。筆者はこれまで学友に恵まれ、国外の旅行にはまず学友を訪れ、「友遠方より来る」的な楽しい対遇を受け水入らずの楽しい時を過して来た。人種・国情を超越した信用・相互扶助の結果現象である。これは筆者にとって最大の無形財産であり、今後と末永くこれを温存して行く。ところが波立たい世相、国際事情というものが何時の時代でもあるようだ。特に近年の国々情勢は純粹たるべき学問の世界を曇らせることがある。一昨年もある国に国際学会が開催され、出席予定の筆者の友人の姿が見受けられず、係員にただしたところ全く意外な要因の介在から参加を中止したとか。本年度もオランダのワーニゲンデンで筆者の専門の国際学会が開催され、プログラムにもある国から四題の興味ある論題が載せてあり、そのうちの一題の著者は筆者の友人である。その国からは少なくとも友人を含め提出題数だけの学者が出席していた。いざ発表の日になって突然これをキャンセルし、その国の学者達は一団となって会場の片隅に座して話し合っていた。懇親会でも出席はしても同じく他の学者との交流を避け賑やかな裡から敢えて離れ、会場の外で淋しそうに食事をしていた。孤独にして悲しい様な状態であった。筆者はその一人の友人に一昨年来の再会と御礼の挨拶をしただけで、実に静かな風景で何と評してよいか、いわ

ば学会での珍事ともいうか。何が斯様な状態を醸成し惹き起したか全く不明である。想像すれば測り知れない。筆者は幸福にも学問的先進国であろうが、後進国であろうが大体主要な国には一名や二名程度の友人を得ている。それは我々学究者の命の綱であって純粹にしていはば学問的盟友である。実に尊い存在である。青年学徒の良き学友と同じ性質たるべき友人が淋しい様相を呈した時、会合から敢えて欠席した時非常に残念である。学者の世界は一つである。それだけに世界に求むる学友・友人との親密度が薄くなるのは一体何の為か。憎むものは国と国との潜在せる無形要因の存在である。これでは学問の発表、真理の追求は期待出来ない。残念至極と悲しい思いがする。

学生諸君も互に各自各様に主義主張が異なるのは当然である。しかし純粹にして純情から求めた学友こそ諸君の人生を明るくする。我々学究者の友人も全く同様である。青年学徒の友人と学究者のそれとは立場こそ違い全く同じ尊い存在が学友であり、友人である。学友・友人間に純粹に極めて自然に生ずる感情が友情である。

農学と農業

教授 吉村喜彦

諸科学の進歩発展と共に、農学の専門分化が進み夫々の分野での研究は、限らない前進を続けている。

近年新聞紙上を賑わした研究の一つに「生物相互間における遺伝子の組み替えが可能となる」という発表があった。これは遺伝子工学という新しい研究分野であり、現在この研究実施にあつては厳しい規制が研究者によって守られているそうである。それは人間が人工的に意図する生物を出現できるということであり、反社会的生物の発生すら可能となると、この研究の応用は、人間社会にとって重要なモラルの問題に突き当たってくるのである。

このような、農学の理化学的指向は、個別的研究として高く評価される結果を生じたとしても、本来の農学が指向する現実の農業生産からみると、凡そ縁遠い研究分野である。

また、生産技術の研究分野においては、日本経済の高度成長期に増産技術中心に研究が進められ、その適用としての農業生産は、天然の環境バランスを崩潰し、汚染

された環境から生産された食糧・食品は、人間の健康・生命すらも脅すという現象を生ずるに至った。
今から六年前、畜産の研究（一九七四年一月号）の「畜産の公害問題と新しい有畜農業」の中で私は次のように述べた。

「日本経済は、高度成長期においてGNP世界第二位を占めたのであるが、その背後には環境の破壊と公害をもたらしながら進化した。その結果、大気汚染・水質汚濁・土壌汚染等の公害は、動植物をはじめ人間生活をも圧迫するようになったのである。畜産公害の発生源が畜産自体にあるように、畜産自体も経済の高度成長期に、自然界のバランス破壊の一端を農業一般と共に担わされてきたといえるであろう。」

以上のように、農学の理化学的指向や経済合理主義のもとでの生産技術のもたらした結果は、初代学長横井時敬先生の「農学栄えて農業減ぶ」の名言を証明することになったのである。

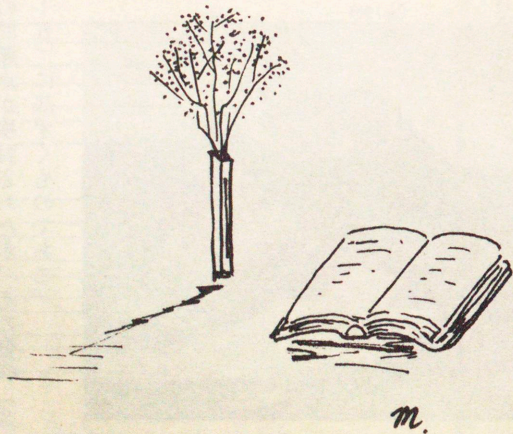
それでは、農学が栄えて農業が栄えるための研究はどのようなにあるべきか。農業すなわち農業経営は、総合的なものである。栽培・飼育等の作業は、動植物そのものの生産・管理のための直接的作業及び環境保全のための間接的作業があり、前者の場合、作物・園芸学・畜産学・土壌学・肥料学・飼料学・農業機械学の応用であり、

後者の場合は、土木学・建築学・電気学・公害諸科学の応用である。農作業自体一般に以上のような高度な学問は必要としないとしても、それらに関する作業の知識は必要とする。だから、今までのように、夫々専門分野でしかも細分化した理化学的指向の研究は、研究自体価値があつても農業に還元されてこないのであつて、農業経営に統合される研究はいわゆるプロジェクト研究でなければならぬ。

数少ないプロジェクト研究の中から、本学でなされた研究の一つを紹介しよう。

△研究題目▽『環境汚染防止対策ならびにその浄化機構と農業生産態系への再利用』△研究責任者▽石丸紈雄教授△研究分担者の所属学科▽農学・畜産・農芸化学・醸造・農業工学・栄養学等六学科

以上の六学科に諸属する先生三十有余名による共同研究である。このような研究は、わが東京農業大学でなければできない研究かも知れない。そしてこのような研究を発展させていくのが、わが農大に課せられた使命と思うのである。



農場だより

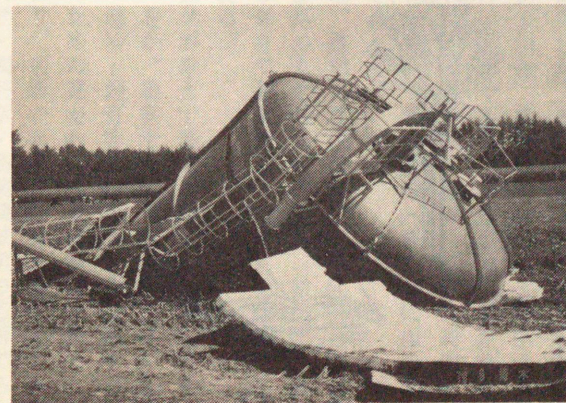
サイロ倒壊事故

講師 大谷 忠

わが国の酪農は昭和三〇年以降北海道を中心に急速な発展をし、五四年二月現在（農林統計）では、酪農家一戸あたりの乳牛飼養頭数は十六、八頭の驚くべき数になっている。これに伴い酪農施設の規模拡大も他の酪農先進国に見られない速さで進み、そして大型化した。特に北海道の酪農地帯におけるサイロについては、その構築が様々な型で大型化し、外壁の色彩も赤白青とカラフルになって、その外観が年々変化している。したがって、ひと昔前に見られたレンガ作りのサイロは牧歌的景観、いわゆる絵になる状態を呈していたが、今ではそれが失われ、そこには近代農業の頼もしさは有っても、どこかに冷めたさを感じられる。このように最近のサイロは新資材を用いたものが多く、その数も急速に増加し、全国的に散見できるようになった。しかしこの近代建築物が一昨年九月（五四年）に次々と倒壊する大きな事故が起

った。サイロが倒れるなどと言うことは、ひび割れはあっても今日まで考えられなかったものである。そこで今回はわが国の酪農界におけるサイロの実態とこの倒壊事故について紹介しよう。以下は、先日農林水産省草地試験場主催の第二回草地飼料作用機械施設研究会でサイロ構造と利用上の問題点が検討されたが、その資料（草地試験場No.五五―五）に基づくものである。

まず、全国のサイロの実態（調査農家六七二戸中）は表1に示したように、その形状は固定式だけでも九種あり、その中の割合は地上角型サイロが最も多く三三%、つぎに地下角型サイロの十五%



高山氏提供

最近増加しつつある気密サイロは四七%、農大の富士農場で用いられているようなバンカーサイロやトレンチサイロは七、八%になっている。この状態からみると気密サイロが占める割合は最も少ないが、この数値は地域性が大きく影響し、北海道では二〇%以上も使用していると思われる。また表2に示したように、各サイロの平均容

積は気密サイロが約一〇〇m³の最大容積を示して、他の形状のサイロに比較すると段違いに大きい。このように一基の容積が大きい気密サイロが普及されてきた理由は、多量詰込みによって良質サイレージを調製することはもちろんのこと、年間平衡給与（常時同一で、かつ栄養バランスのよい飼料の給与）の目的から通年

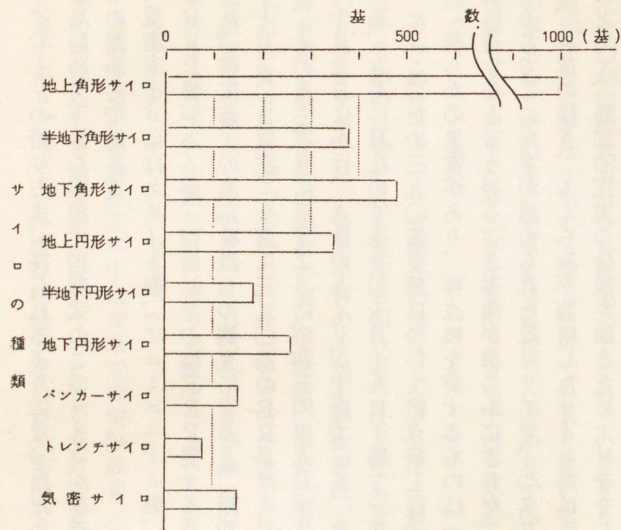


表-1. サイロの種類別基数 (全国)

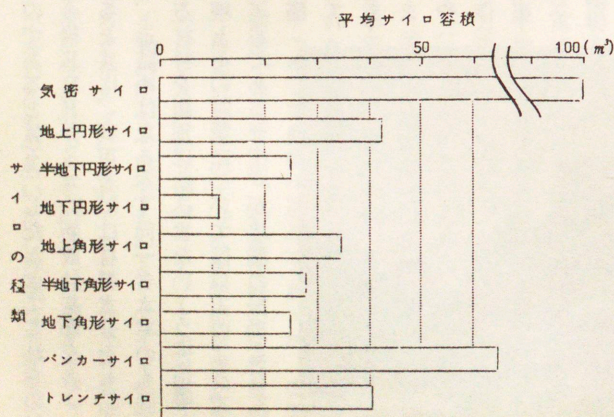


表-2. サイロの種類別の平均サイロ容積

サイレージの給与方式が採られるようになったため、上から詰めて下から取出す循環式のこのサイロが理想的なものだからであろう。

気密サイロにはスチール製、アルミニウム製、およびFRP製があるが、倒壊したのはFRP製サイロであった。帯広畜大の高畑教授らの調査によると、昭和五四年十月三〇日現在、全道に三九〇基のFRPサイロがあり、そのうち写真に示すように昭和五四年九月十九日から十月七日にかけ、A社のサイロが十勝で三基、北見で一基、さらにB社のサイロが十月十九日十勝で一基倒壊した。このため三九〇基全部について総点検を行った結果、何らかの異常があり、再点検を要するものは一八七基に達すると言ふ恐るべき事実が明らかにされた。

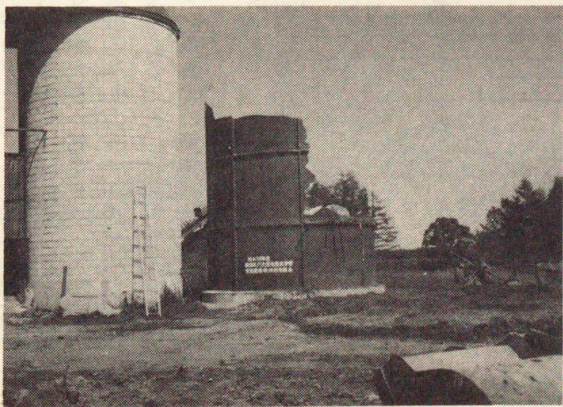
そこでこの異常が認められた既存サイロ、つまり液もれ、本体の傾き、ふくらみが判明したサイロ等は応急補強として、局部的圧力の分散を図るため木材を介し、ワイヤーによる補強措置を講じたとのことである。

倒壊の原因については、調査関係者らは倒壊サイロの原設計が含水率七〇%、サイロ内平均密度一立方メートルあたり〇・七〇、七五トンの埋蔵で、かつ烈震相当の地震が発生しても十分安全であったと結論づけ、破壊の直接の原因はパネル接着部の強度不足とその幅、厚さの寸法違いによるものが、極端な不均一な詰込みに耐えられ

なかったものであると言ふ。したがってこれらの対策に

ついては、今後FRPサイロの新設計基準を各メーカーに確立させると共に、利用者には材料水分を七〇%以下にすること、追詰めはなるべく同一含水率のものを、また極端に異なる材料を層別に詰込まないように指導している。サイロ倒壊とその対策については以上のようなようであるが、酪農のシンボルであるサイロが地震の振動もなく破壊したことは、酪

農家にとつては大変な驚きであり、今までの詰込みや取出し等の作業における事故、有毒ガスや酸欠事故だけではなく、全く新しい安全対策の問題が出てきたのである。



高山氏提供

学生時代

畜産部 鈴木伸一

畜友会は今年で二十周年だそうである。つまり畜産学科が昭和三十六年に茂原分校から世田谷の本校に移転したその年に結成され今日に至っているということである。昭和三十六年は小生の入学した年でもあり思い出深いものがある。その年は茂原から移転したばかりで四年生は茂原育ち、以下三年二年は世田谷育ちでほとんど交流がなかったのである。

大学のキャンパスも現在の様なコンクリート製の建物は一号館のみでそれも現在の四分の三ほどであとは木造の兵舎等であった。畜産学科の本部や研究室は、現在の体育館と醸造学科の建物の間に元軍隊の講堂と思われる木造の大きな建物で、その内をベニヤ板の壁で仕切って各研究室が使用していた。もちろん天井が無いので隣室で行なわれている談話会の声や実験中であらう諸々の臭いまで伝わってくるのであった。

各研究室の室員は四年生は茂原での実際教育（実習以外の時間にも常時家畜と接していた）を受けてきている人達であり、三〜一年生は同時入室の新人集団であり、

したがって四年生は実に怖い存在であったが、また同時に本当の意味の先輩で畜産のことだけでなくいろいろと手施してくれたものである。

その四年生の人達を中心となつて畜友会が結成されたのである。当時の行事は講演会・畜産施設見学会・機関誌ふじみの発行・新入生歓迎会、等があった。

この年の新入生歓迎会と施設見学会を兼ねては、千葉県下の養鶏場を見学し、実に近代的と驚いた。つまりケージを8段重にし、しかも円筒状にして回転させることにより鶏に平均して日光を当て、餌箱と水桶を固定式して制限給与方法によつていた。（当時の主流は平飼または木製・竹製のバタリーであった）そのあとの歓迎会は船橋へルスセンター（千葉県船橋市で現在はない）で行なわれた。当時の夏季実習は二班に分れ、前班後班となり茂原農場で実施された。実習期間は2週間でもしかも寝具持参（各個人がチェック等で農場へ送る）であった。実習の学生数は五十名前後であったが、畜産学科の全教員が指導に當つていた。作業は現在のように農業機械等が無く三輪トラックが一台あるばかりで、デントコーンを刈り取つては自分でサイロの所まで運ぶものと、サイロの中に入つて沈圧させるグループに分れていた。サイロの中に時計を落し半年後に受け取つたものや、サポーターシュがばれて肥桶を担がされたものもいた。作業は大変きつかった

が、三時になるとパンと牛乳のおやつが出た。またある時にはデントコーンのもぎたてを大釜でゆでて食わせてもらったこともある。夜の生活は比較的自由に諸先輩が歴史を残した茂原のまちへ夜な夜な出掛けた。なかには飲みすぎて悪酔してひどいものもいたが楽しかった。しかしこの頃は膳葉の宿題があり提出に苦労したが現在のように未提出者はいなかった。

二年次になり所属していた研究室で、用賀農場からジャージー種三頭も預かり大学のキャンパス内で飼養管理していたのである。粗飼料の確保が実に大変であった。経堂駅の近くの青果市場に野菜屑を取りに行ったり、また現在はサミットストアやマンションになっているところまで放牧に行ったものである。今と違って道路も狭く車の通行量も少なかったので道路の横断も割合に楽であった。しかししたまにはバスに止まってもらった事もあった。学内で飼っているために糞の棄て場に困ったのである。普段は野積みしていたので農学や醸造の研究室にハエや悪臭の迷惑をかけたようであった。また発情がくると自然交配のため国際キリスト教大学の農場へ連れて行くのであった。当時の国際キリスト教大学では農場を持ち牛（ジャージー種）・豚（デュロック・ジャージー種）鶏等を飼養していた。純粋種を産ませるために厚木農場よりトラックを呼んで種付けに行ったのである。

いながら病院へ面会に行かず電話ですませてしまった。

収穫祭関係は野外劇には参加したが、現在のような北門のデコレーションや家畜苑・応援合戦を畜友会が中心になる事はなかった。しかし宣伝パレードは応援団のみが行っていた。

昭和三十八年は現在各研究室の入っている総研の建物、が完成した年でもある。また厚木農場においては、種雌豚が全頭日本脳炎に罹り胎児が全滅したのであった。この年の一年生から厚木農場で実習が実施された。現在の実習方法と異なり畜産実習で畜産学科のほとんどの先生が実習指導に当たっていた。ある年寮監の先生の寝具の中に、バッタならぬカブト虫が八十四も入っていたという話は有名である（当時は電灯の下に多くさん集まってきた）。

二年生は農場での実習でなく学外委託実習という事で各地の大学農場や畜産試験場等に出たのであった。三年生は不定期実習で厚木農場へ日帰りして往復した。その頃の小田急線は大変すいていて向ヶ丘遊園から先はタバコを喫えるのであった。

畜友会の見学旅行は埼玉県下の養豚場とハム会社の見学であった。昭和三十九年は四年生になった。まず家畜人工授精師の講習会があり、大学での講義は大変つまらかった。朝は八時から夕方は五時までびっしり結まっていたのであった。厚木農場での実習は楽しかった。日中は暑くて苦しいが、夜になると涼しく厚木市内の祭を見物

この年の実習は2つあり、まず水産大学の小湊実験所でのウニの発生について一泊二日で実施された。ウニの受精から分割までの観察を行なったのであるが、当時は全学生が十班位に分れて行き、我々の班は水泳をしたり終ってから誕生寺や鯛の浦などを見学したので物見遊山の感が強かった。農場における畜産の実習は茂原農場の最後をかざる実習であるはずが毎日々々が土方の明け暗れであった。つまり畜舎その他移転のための取り壊しをやったのであった。なおこの年農大にも中古ではあったがスクールバスが入り茂原の往復に利用できたのであった。畜友会の方は同級生が委員長・副委員長になり小生も役員の一員になった。（昭和三十七年～三十八年）畜産施設見学会を実施するにあたり、養鶏場でニューカッスル病が多発して見学出来ず残念であった。しかし日本配合飼料の中央研究所と飼料工場の見学では、工場での大量の塵埃の量に驚いたものである。現在の飼料工場を考えると隔世の感がある。なお日配では見学者全員に弁当が配布されたのであった。（無料です）

この年の夏休みに（当時の夏季休暇は七月一日～八月三十一日までで前期試験は九月下旬）役員の一人が病気のため国元の病院へ入院したので見舞に行こうと云う事になり八名で出掛けた。見舞とは口実でキャンプをしたり海水浴やハイキングをし、病人の実家に泊めさせて貰

に行ったり徹夜でおしゃべりをしたりしたものであった。しかし受講するための選抜試験がありそのため研究室で特別講習をしたのを覚えている。当時は講習会が一回三十名のみであった。

この年は最上級生として、一年生の実習の手伝いに行っていた。この頃は八月の旧盆の時期に全員参加で行なわれていた。サイロ詰と河川敷の草刈と干草作りの作業が中心であったが牛の発情があり自然交配を見せることになって大失敗をしたのである。雌牛を雌牛のところへ連れ出そうとしてあつという間に牛の鼻先で壁に押しつけられ結局三週間の打撲傷であった。それ以来雌牛は大嫌いである。この年はもう一つ実習があった。それは教職課程の職業、農業実習である。（現在の畜産学科生は不要）

この教職課程の農業実習には造園・農業経済・農業工学・農芸化学の各学科の連中と合同で実施され交流ができた。変役立つものであった。実習カリキュラムは現在とほぼ同様で我々は自由にやってきたものには大変窮屈に感じた。卒業して製薬会社に就職しそこでこの社員教育の時に農大での一学年が一同に会しての合宿実習は他大学に無いことであり大変羨ましがられたものであった。

この一・二年の間に親しい同級生が心臓病やガンで若死しているのが学生時代の懐かしさも手伝って現在との違いについて託した。

当世学生気質論

(社)家畜改良事業団
印 牧 美佐生

「学生」という言葉に対するイメージは、時代につれ大きく変化していると思われる。わが国に大学が出来た頃、即ち明治中期に作られた帝国大学は、絶対主義的天皇制の国家体制を支える官僚の育成と、富国強兵政策推進のための科学技術の導入と開発がその使命であり、学生はその担い手として時代のエリートとしての自負を強く意識していたであろうし、また社会的な尊敬を受けていたといえよう。

それでは現代の社会で学生とは何なのか。また、大学とはどんな役割が与えられ、どんな位置にあるのか。私は現在でもかなり限られた人数ではあっても、学生と接触する機会に恵まれている。しかし大部分の人の学生に対するイメージは、テレビを中心としたマスコミを通じて形成されているようだ。実際最近の学生はテレビによく顔を出し、映像としても一応サマになる様子を

している。きたないジーンズにラフなセーター、スニーカーをつっかけた長髪の男子学生。どこかのモード雑誌から抜け出たような、ビシッとしまったファッションの女子学生。そして、男も女も語尾上りの話し方で、テレビ局のディレクターが喜びそうな、一見もつともそうで、しかし余り内容のない発言をし、まるで恥かしいという言葉すらすっかり放棄してしまったように見える。

学生とは、最低四年間という時間を勝手気ままに使うことを社会から保証された、GNPを肥大化させる消費者の集団か、またテレビや週刊誌の隙間を埋める奏人的タレントの予備軍でしかないのだろうか。

また、一方では学生のスポーツ面での活躍も見逃せない。野球の原クン、柔道の山下、古くは輪島また朝潮など、わが国のスポーツの水準は、相当部分学生選手によって支えられていると言っても良い程だ。

これが中学や高校時代に、受験々々と追いまくられ、灰色の青春を送ってきた同一人物とはとても信じられない。灰色の時代の反動が学生時代という仮の時代に、その様な態度をとらせているのだろうか。

しかも、直ぐに別の形の反動が来る。就職である。今まであれほど「自由」を謳歌し、「画一化」を軽蔑していた人達は、またたく間に紺のスーツ(どういう訳かきまってスリーピース)に身をかため、髪はきちんと七三

に分け、次から次へと「立派な」社会人として出来上っていく。

以上のような俗っぽい、しかしそれほど外れでもない学生観が社会に定着し、またその反映もあって学生にも定着していると言えると思う。しかしこのような一面的な、主観的な学生観ではなく、本来の、そして客観的な意味での学生とは何なのだろうか。このことを考えるには、大学そのものの意味を考える必要がある。

大学は教育と学問研究の場である。この大学に対する定義は、古くさく現実離れたもののものである。しかし、私は正しいと思う。ただ、教育や研究の機能は大学のみがもつ訳でない。国公立や企業の研究所、さらに各種の技能養成学校や、もっと広く考えれば社会全体に教育と研究の場が存在する。その中で大学は、目の前の利害にとらわれず、自由な立場で国の将来や社会の発展、人類の幸福に役立つ教育と研究を行うことが保障され、また期待されているという点で他と異なっている。また、教育と研究の過程に、学生という非常に多数の青年の集団が関与するという、極立った特徴をもっている。私はこのような意味で、大学の自治、学問の自由が保障され、また守られるのだと思う。

すなわち、学生は授業料等を支払うことによって大学の経営を成立たせる(私立大学の場合)とか、数からい

えば大学の構成員の大多数を占める、といったことだけでなく、大学の学問研究を進展させる重要かつ不可欠の構成要素であるといえる。当世風に言えば、学生が主役であって、学生を中心にして大学の教育・研究が進展すると言って過言でないと思う。

以上のような考えから、私は最後に学生諸君にもっと論争をするようにすすめたい。明確な根拠なしに他人の意見などに迎合し、また反発し、あるいはそれを無視することは良くないことと思う。様々な事物を本来どうあるべきか、そして現状はどうなのか、などを正確に判断することから自らの考えをはっきりさせ、他人の考えとの違いを浮きぼりにすることから論争がはじまる。他人の考えを論破するためには、自らの意見が相当明瞭でなければならず、また他人の考え方も正確にとらえられなければならない。徹底して論争すれば、もし自己の主張に誤りがあった場合も、それが明確になり、同じ誤りを繰返すことがなくなるだろう。このような論争を通じ物の見方、考え方を養い、そして行動する底力が培われる。四年間という貴重な時間、文化、スポーツ、娯楽等で大いに青春を謳歌するとともに、社会の中にある、社会とともにある大学の重要な構成員として、自覚的に考え、行動されんことを希望してやまない。創立二十年にあたり、畜友会、ふじみの発展をお祝い申しあげます。

肉牛経営の基本と理念

群馬鈴木総合牧場
鈴木 正

我が国の肉牛経営に付いての基本と理念とは、どうあるべきか、又障害に直面した時、どう理解して超越し、安定経営の基盤を造るべきかを考えて見よう。

先ず経営に一番大切な事とは何であるかと言う事である。先ず経営の起点であると思います。

一旦進路を定めた以上其の道しかなしと、心に決め付け、強固の精神力で経営に入るのが大切の事と思います。とかく人間は、目先の事ばかりの計算を持って安易に物事を判断して、初め勝であるが大きな間違いであり、生来の経営に不安定要素が付きまとい、途中において計り知れない経営意欲と精神力の減退とが、必ず生じて不安定になり、それを建直すには、相当の年月と精神力の負担とが必要となるのであり、其の危険を生まない様にするには、どうあるべきかと、言う事である。

先ず価格の低迷した時が、経営の基点とすべきである。とかく肉牛は、価格が低迷したと言う事になると、他産業に比べ生産期間が長いだけに、思い切りの判断が容易に出来るものでなく、回復に相当の期間が必要となるの

で、自己では、意識しながらも思い切れずどろ沼に入ってしまう事が、ごく普通となっているから理解できない。其の時点こそ一番大切な時である。

この時点を経営の起点とすべきであり、又経営の改善時期でもあり、規模拡大の時期であることは、忘れてはならぬ事である。人間心理上この時点に直面すると考え込んでしまうのが、本来の常識であるが事、肉牛経営においては、この時期を見逃がするは出来ない重要性があると思う。

今、私達の上にある農政も危機をおおる要素が多分に存在して矛盾の山積と言わざるを得ないのではないかと思う。それは、経営意欲の欠けた人達にのみ設けられた農政であると思われるが、それは、無駄の補助とか助成であると思う。その事が適切に行われていたなら経営に対する自己の怒力と、変化とが向上し経営基盤が不動の存在となっていた事であろうと思います。

この事に付いては、己々に理解と反省が出来る事でしょう。その矛盾と欠隔を打ち破り経営基盤を造らないうと安定しないのである。

先ずその矛盾した農政に甘え、溺れていたのでは、経営の安定と成功が達成出来ないのではないか。

基本的に物の考え方からして間違ってしまった、安易さが芽生えるからして、社会の変乱を乗り切れず墮落する事

が必至である。

現在の農政は、補助とか助成とか言う援助の麻薬により、不安の渦に農家経営を巻き込んでしまっていると思は考えている。一旦、渦に巻き込まれた人は、なかにそこから脱皮出来なくなってしまうのが大部分の経営者であると思います。

わかり易く言うると百の経営能力しかない者に対し、二百の負担を背負わせてしまっているのである。意識して、百の能力に二百の負担を背負ったのであれば考え方で何とか改善出来る見込みがあるが、大勢は無意識に等しい状態で自然に二百の負担を背負ってしまったから取り返しの付かないことになってしまうのである。

今後の農産物は対外的に見ても大きく変わるでしょう。米のレーガン政権誕生により貿易自由化と言う事は避け通れない事実と成って来ると思う、それと国内の財政再建とのさみ打ちにあい経営の明暗がはっきり分けられる事になる、これ等の諸構成に打ち勝つには経営努力と基本的理念しかない。先ず目先の安易の判断で物事に当ってはならない事が大切である。

現在が良いからと言って多額の借金をして、経営に飛び込みがちになる時には、農政も安易に融資する態勢になっているからおかしい。

その様に総てが、目先を持って始動しているからよほど

自己の強い判断力と見透しに付いて、研究する必要がある。今、良いからと言って、天井知らずに価格の上昇などあるはずがない需要と供給のバランスにより、自然に価格は設定されるので、あるからして暴落暴騰となって経営をおびやかすのである。それから追って見れば、良く解るのであり、価格の底辺を経営の起点にしたなら生来に不安が生じる訳がない。

とにかくこの時点では、大くの抵抗があると思うが、経営全般からして見ると、途中の困難を経営の起点で全て乗り越えてしまえる事であるからして、安定経営となる。この事は、私の経験上、肉牛経営の鉄則であると言える。とかく肉牛は長期に渡り資本を投入し、製造年月をかけるないと生産されず、他の経営に比較出来ない特異的の要素が含まれているのである。

乳雄にして三十ヶ月―二十五ヶ月、和牛で三十五ヶ月―四十ヶ月と言う肥育期間を要するので、この間の価格の変動社会状況の変化も生じうるので、特異的の判断を必要とするのである。

国内の肉牛経営者の九十九%の人が考えているのが、目先、現在である。

それを立証すると、三十頭で利益を上げ、八十頭で損をするという事であり、それが肉牛経営のパターンと成ってしまったている。

残る1%の人が恩敬にあずかっていると云う事は先いつてなさない事である。

諸君生来の日本農政に付いて、この1%をどう拡充出来るかと言う農政の地馴らしこそ、今日の諸君に課せられた課題であると私は諸君を信じ期待する。

要するに特に肉牛経営は、他人の経営ではなく自己の経営にしないと、生来肉牛経営は安定しない。

一旦自己みずからの経営に達成すると、この上なき総て無類の産業として、生来約束出来るは間違いない。

その安定基盤の造成は諸君の指導者、OB達で広域産群と言う組織を造り、全国の情報交換と経営研究が、出来る様にすると生来の育産経営が不動の存在となり、最善の様相と思えます。

頑張つて努力して欲しい、又、大いなる期待を持つものであります。



或る農民の主張

JAC(ジャパンアピールキャンプ)
永田雅信

毎日、朝から晩まで百姓ばかりしているとアホになつてしまふのではという妄想に落ち込みそうで、ヒマを見つけては講演を聞きに行く、いつも行つて思うことは「来なきやよかった。」ということ、それでも何か一つくらい教えてくれるのではないかとやさやかな期待とともにまた足をのばす。講師は大部分普及所、組合、経済連、他の「長」とつく人たち、この種の人たちの講演で決まって出てくる言葉は「農業もやり方次第で……」「現在の日本は自給率が減少するばかりだ。その為に後継者を増して……」ということ。講演の中、私はこの言葉を聞くたびにいつも「アホ講師、もっと勉強せい！」とつぶやく。講師の人たちが別に悪いわけじゃない、私以外の人は、言葉をかみしめる様に聞いているのだから……立派なものだ……だからかも知れないが大部分の農民の農業に対する考え方が立派すぎる。悪く言えば、他人に作られすぎてるように思える。だいたい「長」とつく人自身は農業をしてないのだし、新聞や書籍で勉強したことをそのまま言っているにすぎないわけだから、

どうしても農民と考え方が違つてきてしまふ。もっと悪く

言えば、私たちは生産者だが「長」とつく人は消費者なのである。消費者の考えつてのはどうしても、たとえ農業関係の職に携わつていると言つても、やはり農民とは違う考え方を持つている。違う考え方を持つていること自体は農民にとつて考え方の違いを見る上で学ぶところはあつたが、その人たちの意見を「農民の意見」のごとく農民自体が考えてしまふのはどうかと思う。農民はやはり、農民自身の意見を持つべきだろう。たとえそれが理論的には多少おかしくても、やはり本音で農業を語るべきだろう。それでは、農民自身の意見とは何か？それは農民個人個人によつて違うだろう。そこで「農業もやり方次第で……」「現在の日本は自給率が減少するばかりだ、その為に後継者を増して……」という意見はおかしいのじゃないかと思う。自身の本音を、それが理論的には多少おかしいかも知れないが「こんな考え方もあるのか」と思つて貰うためにも書いてみよう。まず「農業もやり方次第で……」ということだが、だいたいの職業つてもものは何だつてやり方次第ではうまく行くもの、当然農業にだつて少しはうまく行く人もあつたろう、しかし農業の場合、その「やり方次第で……」で成功した人はほんのわずかじゃないだろうか、毎年長者番付が出る、その中に、農業収入での松下幸之助はいるだろうか。番付表に出る人さえも「すずめの涙」、これだけ見てもわか

る様に、「やり方次第で……」なんて言い方はおかしい。

「現在の日本は自給率が減少するばかりだ、その為に後継者を増して……」というのもおかしい。私は根っからの百姓だから、いつも少しでも働かないで、より多く儲けようというのを考えている、そうすると先の意見は当然おかしく見えてくる。そもそも、百姓の一人一人が日本の自給率のことまで考える必要があるのだろうか。現在まで自給率を減らしつづけてきたのは百姓から第二次、第三次産業へ人を動かしてつづけてきたのは国なのだ、それを今になって自給率うんぬんくんぬんと言つたところで、それを真にうけて動く百姓もバカというものだ、農民にとつて自給率が減れば、輸入さえなければ需給関係で生産物一つに対する価値が上がるわけだから、自給率が下がるといふことは、むしろ喜ばしいことだし、「後継者を増そう……」なんてことは、生産物を増やすことと同じことで、農民が言うべきことではないはずなのにどうもその辺がわからないらしい。現在私たちは資本主義の世の中に生きていふ。当然農業もその中での一つの産業でしかなく、それ以上の特別な産業でも、それ以下の産業でもないはずだ、ならば農民も、より少ない労働でより多く儲ける考えをし、やれ自給率だの、やれ後継者だのと農民自身が先に立つてさわぐようなバカなまねはすべきではないだろう。

中国を旅して

— 二つの中国の畜産事情 —

助教 石島芳郎

畜友会の役員の方から何か話をしてほしいとのことでしたから、専門をはなれて外国に行った話題がよいと思いい表題のような話をすることにしました。

私が実際に中国（中華人民共和国）を旅したのは一九七八年のことなので、一昨年のことです。ところが運よくこの五月の連休に台湾に行く機会があったんです。それで特に、「中国を旅して」という題ではありますが、「二つの中国の畜産事情」という副題をつけてみました。これは何も、二つの中国の比較論をやるうとかいうものではありません。

なぜ、わざわざ二つの中国などという言い方をしたかという点、いわゆる中国、みなさんには毛沢東のといえはわかかってもらえると思いますが、その中国は中華人民共和国、略して中国といえます。正式名を略した時には

もしろい勉強は好きじゃない方ですから、物見遊山を目的に行ってきたのです。

しかし、ただ観光話だけでは失礼ですから両国の畜産概要をおくばりした要旨にメモしておきました。もし、中国の畜産事情に興味をもたれる方のために文献もあげておきました。畜産の研究や獣医畜産新報ですからさかじやすいと思います（要旨にあげた文献は末尾に記入）。

私個人としては『ふじみの』の去年の号に「かいま見た中国の畜産」ということで、一応自分がまわった畜産施設のことだけは報告させてもらっています。ですから、それにご記憶の方があると思います。もうひとつは、本当の紀行文を発表したかったので、私の関係している沖縄県人会の会誌『はるさあ』に、感想文（のべ十六ページ）を「中国を旅して」ということで書いておきました。それには、中国の印象を詳細に生活面を含めて書いてあります。もし読みたい人があれば申してください。

それでは本題に入ります。中国は今までは日本からは行きにくい国でありました。ところが日中友好という話を持ち上がったからは大変好意的になりました。私たちは、実現する三年前からいろいろと申請をだしていましたが、とうとう日中友好条約が結ばれるまでチャンスがこなかったのです。それでやっと実現して、さっき述べた八月十九日から二週間、その間、北京、南京、上海、

中国といってくれと彼らは言っております。台湾は中華民国、略していう時は中国と言ってくれといっているわけなんです。したがって、それを二つの中国としたわけでありまして、別に思想的な話をしようとか、そういうことではありません。

私が中国（以下、中華人民共和国をこういう）に行きましたのは一九七八年の八月十九日から二週間でありました。八月十九日という日は、日中平和友好条約締結から一週間たったばかりの実によい時でした。私は、日中友好獣医畜産関係者訪中団というグループに参加したのです。グループの仲間は、団長が茨大の中村亮八郎教授で、あとはみな畜産か獣医をやっておられる先生方で、農大からは私一人でした。グループの仲間はほとんど私の知り合いだったので、気がねなく行ってこられました。

次に、もうひとつの中国という台湾には、今年（一九八〇年）の五月二日から五日まで三泊四日で行ってきました。この旅は、台湾に畜牧獣医学会という学会があり、その学会と日本の東京獣医畜産学会が連合の大会をやるということ、それに参加したのです。東京獣医というのは現在の日大農獣医学部の前身であることから、会員の多くは日大関係者なのです。私は大学院が日大でしたので、むこうで座長をやってくれと依頼があつて、それじゃと出かけてきました。私は元来でかけた時はもつと

広州、そして最後に香港を経由して帰ってきました。

ご存知のように中国大陸は日本の約二十五倍の面積を持ち、非常に広い国であります。横に五千キロ、たて五千五百キロあり、万里の長城だけでも日本の北海道から沖縄まで行く位の距離があります。私たちがまわったコースは発達した都会地でした。中国はその頃まだ見せるところを選んでいて、施設が整ったところ、つまりホテルのあるところしか対象にしてくれませんでした。したがって我々が本当に見たい内蒙古、チベットの方の馬を走らせているところや、黄牛・ラクダなどを飼っているところは見られませんでした。まあ、あたりまえのコースを歩いてきたにすぎません。

中国は極めて質素な国で、一切のぜいたくをしていません。そのひとつの例が、人民服や、夏のモンペ姿のようなスタイルに代表されます。私はその話を以前からよく聞いていましたが、いざ飛行機に乗ったところ、スチュワーデスが白いブラウス姿に紺のズボンといった質素さ、そしてお茶を入れてくれる道具がヤカンなのです。それで私は、前に中国のことを書いた時に、ここから中国が始ったと書いたわけなのです。着いた時、飛行場はすばらしいのに国際空港内のイスは綿がでていたりしてビックリさせられました。毛沢東と華国鋒のばかでない看板がやけに目につき、迎えの人に会うまではドキドキ

のしっぱなしでした。出迎いのセレモニーがまた大げさで、中国側が「わが国は今、毛沢東、華国鋒の指導のもとに四つの近代化をめざし着実に歩んでいる……云々」とあいさつすると次にこちらの団長が同じようにスピーチをするというぐあいなのです。

すぐに行つて気がついたことは、夕暮れでしたけれども、往來はまっ暗で外燈がショボショボついているだけで、その下に人がたむろし本を読んだり、食事をしたりして、いきかう車は小さい方のライトだけつけて走り、自転車はまったくライトをつけていません。省エネなんですよ。それで用が足りるし、家の中にはほとんど電気がないのです。ですから、最近マスコミなどで中国もなかなか進んだように映っていますが、実際にはほとんどの家に電気がなく、家の中にはベットらしいものがひとつある程度、台所にナベひとつ、部屋にテーブルがあるというのが現実のようです。ラジオはかなり普及していましたが、テレビはもちろんありません。彼らは自転車は自分で買うことができますが、車は持つことができません。ともかく、ぜいたくをしない大変な国です。

それで、具体的に中国の生活レベルを見ると、当時で大卒の平均給与は日本円になおして五千円ぐらい、一般の人で七千二百円ぐらいが相場です。だから日本と比較

する場合はそれを念頭に入れておく必要があります。その当時、自転車は一台が日本円で一万四千元位ですから、彼らの二カ月分以上の給料の値段です。白黒テレビが三万六千元ですから、なんと五カ月分の給料がないと買えません。ということは、ぜいたく品は非常に高いということなのです。その代わり、逆に家賃は日本円で百二十円ぐらいです。私たちが飲んだホテルのコーヒ一杯の値段よりも安いのです。というように、ぜいたく品は非常に高く安いものは徹底的に安くしてあります。その代り、全部の人が同じ生活レベルで生活しているというのが中国なのです。娯楽は、映画と観劇、もちろんパチンコ屋もゲームセンターもあります。楽しみもなく、よくがんばれると思われようが、彼らには国を榮えさせるという任務があります。だからぜいたくする人、文句をいう人、きれいな格好をする人はいません。もっとも、本人たちの気持が本当にそうなのかは疑問ですが、思想教育によりそれは徹底しているように見えました。まあ以上のような生活背景を頭においてあとで説明するスライドを見てください。

のもわざわざいしています。ここでお話しするのは帰国後調べたFAOのデータがもとになっています。(表1参照)ともかく多いのは事実で、家畜の飼養頭数を全部合わせると、少なくとも世界中の三分の一は中国にいること

になります。最も多いのは豚で、数で二億数千万頭(一説に四億頭)おり、全世界の三分の一を占めています。また家畜の種類も多いのも特徴です。ロバ、ラクダ、水牛、馬とロバの雑種ラバなどの畜力利用も盛んです。交通機関は車と自転車と荷馬車が三分の一ずつの比率です。家畜の数が非常に多いのに畜産公害という言葉はありません。なぜなら、その糞を有機肥料として大事に扱っているからです。九億近い民を養うには食物増産しかないわけですが、中国の四〇〜五〇%は不毛地帯ですから、食料自給が急務でそれには沢山の肥料がいるのです。しかし化学工業があまりすすんでいないので化学肥料がありません。家畜糞どころか人糞もすべて利用しているのです。畜産公害など生れようがありません。これを聞くと遅れているように聞こえますがそれは逆です。日本の農業の不幸を考えると中国の方がかえってよいように感じます。たしかに、中国は日本に比べるとすべての面で二〜三〇年は遅れているでしょうが、それを遅れていると表現する前に反省しなければならぬ面が多々あります。物をすてずに大切にす中国の方がむしろすすんでいるという印象を持ちました。

表1. 中国における家畜の飼養頭、羽数 (単位: 万頭, 羽)

	1961-65	1974	1975	1976
ウマ	756	700	700	700
ラバ	166	157	157	157
ロバ	1,125	1,166	1,172	1,171
ウシ	6,127	6,370	6,411	6,460
スイギュウ	2,832	2,983	2,992	3,012
ラクダ	126	108	107	107
ブタ	19,692	23,364	23,281	23,832
ヒツジ	6,452	7,270	7,350	7,450
ヤギ	5,374	5,938	6,019	6,069
ニワトリ	100,408	125,933	128,117	131,200
アヒル	403	691	710	749

(FAO Production Yearbook Vol. 30, 1976 より
千のケタ四捨五入)

私たちは、もっともらしい名称のついた団体でしたが、中国は自分達が見たいところに自由に行けるといふところではなく、彼らが設定した場所しか見ることができませ

ん。ですから、案内された農業施設はかなり整ったところが多いので、私たちも真の中国の姿を見たことにはなりません。でもいろいろ見て感じたことは、畜産技術においては何と昔前の状態でありながら、労働者のエネルギー的な精神力は日本以上だということですね。

一方、台湾の方はといえば、これも中国人が住んでいます。台湾は、六〇七世紀のころから中国人が渡って、原住民と共に住んでいるのです。以前は全部が中国領土であったのが日清戦争のあと日本領土になり、その後中国の内戦に敗れた国民政府（蔣政権）が移り建国（政治的決着？）したことになると思います。したがって帰属問題は複雑になっていて、現在台湾を国と認めているのは世界各国でも二十数カ国、日本は中国と友好条約を結んだことから正式な国交を放棄しています。中国と台湾はお互いに自分達の方が本当の中国だと主張しています。それはともかく、現在の台湾は資本主義の国であり、しかし、風土や畜産の雰囲気は中国と非常に似かよっています。気候的には亜熱帯から熱帯にかけてのとても暖かい国です。

家畜の飼われ方は中国と非常によく似ていて、やはり豚が中心になっています。なんでも、農業生産額の三〇%を占める畜産のなか豚は六〇%を占めるといわれます。家畜の飼養頭数は一九七九年の統計で、豚五百四十一万

頭、牛八万頭、水牛六万頭、ヤギ二〇万頭、ニワトリ三千八百万羽、アヒル一千万羽となっています。（表2参照）

表2. 台湾における家畜の飼養頭、羽数

	1977※	1979※※	
ブタ	368万頭	541万頭	ランドレース、大ヨークシャー デュロック、ハンプシャー
ウシ	13	8	ホルスタイン（乳量年間4,200） 黄牛もしくは肉用雑種
乳用	2	2	
肉用	11	6	
スイギュウ	12	6	
ヤギ	21	?	在来種
ニワトリ	2,835万羽	3,836万羽	白色レグホーン
卵用	627	1,078	
肉用	987	1,807	
在来種	861	951	
アヒル	805	1,012	
卵用	?	291	
肉用	?	721	バリケンとアヒルの雑種が主
ガチョウ	137	150	
シチメンチョウ	68	70	

ヒツジ 1,000頭台 ウマ 100頭内外

※ 久保田(1980), ※※ 台湾省農林庁畜牧科長の講演(1980.5.4) から

規模や家畜の種類においてちがいがみられますが、構成は非常に中国と似ています。一九七九年のデータは学会に出席した時特別講演で示されたものでして、現時的最も新しい情報です。

（この稿は、一九八〇年六月二十六日に開催された畜友会講演会の前段の部分を録音テープから再録したもので、若干の修正を行なっている。再録にあたってご協力いただいた研究室の富樫守氏はじめ室員の方に感謝する。）

〔文献〕

1. 笹崎竜雄（一九七五）最近の中国の養豚事情（一）三。畜産の研究、二九卷一〜三号。
2. 笹崎竜雄（一九七八）中国の畜産事情（一〜三）。畜産の研究、三二卷一〜三号。
3. 笹崎竜雄（一九七九）中国の畜産、その概要と動向（一〜六）。畜産の研究、三三卷二〜七号。
4. 久保田建御（一九七九）台湾の教育制度と家畜診療（一、二）。獣医畜産新報、六九四と六九六号。
5. 久保田建御（一九七九）台湾を旅して（その三）、獣医畜産新報、六九九号。
6. 久保田建御（一九八〇）台湾を旅して（続）、獣医畜産新報、七〇二号。

台湾からの便り

前略、先生からお手紙をいただいてからしばらくになりますが、お元気ですか。先生から依頼された件いつも心にとめ、写真の取れる場所等をいろんな知人に聞いたのですが、いづれも台北からわりと遠く、毎日忙がしくしている私にとって郊外に出る機会もなく、ならば農業雑誌から切り取ろうと思いましたが、手近によいものがないまだ手に入りません。いまも捜していますが、期限までにまだ手に入りません。お詫びのつもりで……云々。

私の父の田舎は、電車で二時間くらいのところにあります。そこでは、家の奥の方でアヒルやニワトリを常時十羽ほど養っています。お祭りや、客があるときなどそれを料理するのです。田舎では三軒に一軒くらいの割合でアヒルやニワトリを飼っています。それは、全く商売ではなく、自給用です。

路上や軒先で殺したばかりの豚やニワトリの肉を売っているのもよく見かけます。台北では、もちろん近代的なスーパーの食料品売場にパックとなった肉がならんでいます。それは別、いたるところに市場があり、

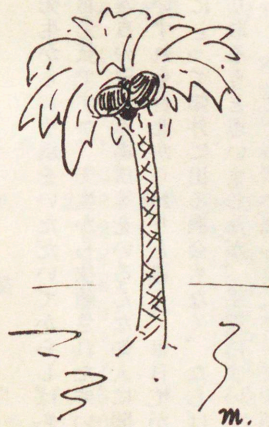
そこでは生きたトリをその場で殺して売りさばっています。さすがに豚は、すでに肉塊になったものならんでいるようです。牛肉はめったに見かけません。中国人は食べることにかけては研究が進んでいると思います。また客をもてなすのが大変好きな民族でしょう。貧しければそれなりに工夫して味付けし、うまく接客をします。以前、水牛、黄牛は畑を耕したり、車をひいたりしていましたが、最近では機械化が進み、徐々に少なくなってきました。搾乳用ホルスタイン、肉用外来種牛もおりませんが、あまり景気はよくありません。

私はすでに台湾で一年が過ぎましたが、思うことは、ここ数年台湾は商工業とも目ざましい発展途上にあり、以前の日本以上の速度ではないでしょうか。石油のありか物価はたびたび上昇し、今年春には五〇〇元札、一〇〇〇元札が出回り、一層インフレにはくしゃをかけています。暮らしは東京とあまり差はないと思います。思想、考え方の面においても西洋人のものが深く入りこんで、私から見ると、急激な発展、変化、忙しさのため我を失っているふうにも思えます。まるで日本のあとをたどっているようです。

あと一年滞在するつもりですが、あらゆる方面からこの国を味わって、また、こちらの立場から日本を考えて見たいと思います。では（一九八〇年十月十七日）

曾野徳昌

この便りは、私が台湾に出張した際旧交をあたため、帰国後、「ふじみの」に一緒に台湾の畜産について書こうと、写真や情報をお願いしていたのに対する返事として寄せてくださったものです。手紙のぬし曾野（旧姓、曾）さんは、本学畜産学科を昭和五十三年春に卒業し、昭和五十四年秋から台湾で仕事をなさっています。「ふじみの」の締切りを気づかかってわざわざお手紙をくださったので、本人におことわりなしに載せさせていただきます。（石島芳郎）



北海道別海町から

私と別海の四季

別海町酪農実習生受入協議会会長
角川 義 捷

私が農業に、はじめて関心をもったのは、小学生の後半になってからだ。

昭和二十八年、他府県から新婚早々の若者や单身入植者、そして家族づれの若者達が戦後開拓のしんがりとして、入ってきた。彼等の入植した土地は、別海の中でも傾斜が多く市街からもはなれてる条件の悪い所だった。その当時、私の父は、そういった開拓者たちに鉞やまさかり、馬具などを売る店を開くと同時に、彼等から木炭を買っていた。それで父の店は、そういった開拓者のたまり場となり、多くの人達と家族的なつきあいをしていた。ある日、そんな彼等の一人につれられて、遊びにいった事があった。

山道を踏み、沢を越え、原野の中にボツンと家があった。私が家にはいると奥さんは喜んで、その晩風呂をたいてくれた。風呂場と井戸は、なぜかくつついてる。ツ

ルベで水をくむので、それが大変だからなのだと思う。野天で、月を見ながら入る五右衛門風呂、風流に聞こえるかもしれないが、現実には、風呂をあたためる煙が目に入り、けむいのなんの、おまけに虫が寄ってきて体を刺す。

開拓者達は毎日毎日、木を切り倒す。切り倒した木の根を鉞とまさかり、鋸とスコップで取り除くのだ。切っても切ってもはてしなく続く木。いつまでたっても畑は広くならない。手に豆をつくり、土にまみれて作った畑。なのに植えた（蒔）ソバや麦、エン麦、馬鈴薯、ビートも気候が悪いのか、なれぬ手と土地ではさっぱり取れない。開拓者達の現金収入の多くは、木材と木炭という年月が幾年もつづいたはずである。彼等は街に出て来ると焼酎をおおぎ、大騒ぎでのし歩いた。

彼等自身だけでなく、女、子供までまき込んだ苦しみに耐えられず、沢山の人達が別海の開拓地から去っていった。

当時の私は、まだ小さかったので彼等のつらさ、苦しさを、そして悲しさが解らなかつた。なんとだめな人達だ。私は、そのように思ってた。その時は、私自身が彼等と同じ道を歩くようになるなどと、考えてもいなかったのだ。

昭和三十七年、二十才の時、私は今住んでいる地に身入植した。この土地は私の父が戦後開拓の一陣として、昭和二十一年から二十六年まで開拓したところのある土地。離農して街に出た父が、施肥検査がうからぬまま、それでも手離なざるに持っていた土地だった。

最初の幾年か、先輩達のように鋤とまさかり、鋸とスコップで、根っ子したいじにあけられた。七、五坪の住宅と、一〇坪の畜舎、ツルベ井戸、一〇頭に満たない馬と牛、そんな生活が五年間つづいたのだ。

丁度その少し前、昭和三十一年と三十二年の五年間に三三六戸の新しい酪農郷が別海に誕生していた。当時としては経営規模も生活環境も社会資本も、格段に整備されていたその酪農郷は、政府が世銀から資金を借り入れ、北の荒地に一夜にして造りあげた根釧バイロット・ファームである。

根釧バイロット・ファームには道内はもとより全国各地から様々な人が集ってきた。親・子・孫と三代の家族による篤農家あり、猛だけしい農民活動家あり、大学を中退して入植した者もある。そして、大半の人達は若夫婦による入植だった。彼等は勇氣と自信に満ちあふれ、個性豊かな野望をいだいてたのだ。

だが、しかし彼等を待ち受けていたのは厳しい大地だった。

って、豊かさを与えてくれるのだと。一年や二年のことではない。十年単位でのことだ。

私の農場もこの十八年の間に、畑を作ったり、乳牛を飼ったり、肉牛を飼ったり、それ等を組み合わせたり、止めたりして来ました。

今はビート、馬鈴薯、コーン、肉牛と……畑と肉牛育成の二本立てです。

十年、二十年、せめて三十年位で私の農場を完成させたいと思ってます。

あと、一、二年後、どんな私の農場が出来あがるか楽しみです。

北海道実習記

畜産一年 宍戸 寿

実習開始

ブ〜という搾乳機械の音が、眠っていた私の耳に聞こえてきた、と同時に私は跳ね起き、時計を驚愕みに握って、まだぼやけている目で見ると、何と朝の四時三十分。そうだ、ここは北海道なんだ。

私は、階段をなるべく音を立てないように駆け下り、す

政府が鳴り物いりで外国から導入した牛は病にたおれ、やむなく作った換金作物は思うようにとれず、外見は立派でも、あるのは当時として巨額の借金だけ……。

まもなく一人去り、二人去り、夜逃げがあいついだ。矢折れ刀つき、借金の支払いのため、昼間離農することの出来ぬ彼等を、誰が責めることができよう。

根釧バイロット・ファームが、名実とも大地に根を張り始めるようになる十五年間に、三三五戸の彼等は二〇五戸になっていた。

今年もまた農大を始めとして、多くの大学生が別海酪農の実習にやってきた。大学生の実習はたいい一カ月間位です。

一カ月の間、朝早くから夜遅くまで、なれぬ農作業にとまどいながら、汗を流します。手に豆ができた、ひびが切れた。腕がだるい、腰が伸びない、痛い、皆さんにとって時間をかけて単調な仕事をする辛抱が大変だったと思います。

近代農業は、大量の資金と資材を投入し開発に要する時間を短縮することが出来た。しかし、肉体労働をなくすことはできなかった。まして脱落者をなくす事など出来ぬ相談かも知れない。

私は思う、大地はそこで営む人々の勤労と創意工夫によって、豊かさを与えてくれるのだと。一年や二年のことではない。十年単位でのことだ。

私の農場もこの十八年の間に、畑を作ったり、乳牛を飼ったり、肉牛を飼ったり、それ等を組み合わせたり、止めたりして来ました。

えるように、牛床を通路よりも10cmほど高くして、そこに大鋸屑や乾草の食べ残しを敷いて、牛の前部がやや高くなるようにしてある。通路から見ると背線が真直ぐでとても綺麗に見える、牛舎の設計にも牛が良く見えるよう気を配っている事がわかり、それに加えて、いずれ七百kg〜八百kgぐらいの大型牛とあって、とても迫力があり素晴らしいものでした。

毎日、広い牧場に放牧させるため、良く立った強くスラリと美しい足をしており、汚れているのは、毎朝、奥さんが洗ってやるので、鎧を着てる牛はもちろん尻に糞を付けている牛は、一頭もいませんでした。

このような佐藤牧場での、私の一日の仕事内容。

朝、四時半 約七十頭分の飼料給与。約四十頭の搾乳。

← D型ハウス内（子牛が二十頭入）の除糞。

八時 牛舎内の除糞と清掃。

昼 十時 隣家のD型ハウス作り。二年間分の堆肥を

ダンブで畑に入れる作業。

← カブ取り（七十八馬力のトラクタを使用）

四時 その他の雑用。

夕 五時半 飼料給与。育成牛の管理。

舎内に大鋸屑を敷いて、舎内清掃、その他。

北海道実習は、大学に入学する前からの念願だったので、それが「叶った」と、始めの二日ぐらいいは、喜んでとても張り切っていたのだけれども、張り切りすぎたせいで、三日目ぐらいには、体のあちこちが痛んだりしてなかなか大変でした。でも、一週間もすると仕事にもずいぶん慣れ、帰るころには、仕事もほぼ完全に覚えスムーズに進むようになり、「ずっと北海道にいたいなあ。」などと思うようになっていました。

残念だった事といえば、晴天が少なかったのと、乾草のコンボ作りが出来なかった事です。北海道の青空を見たかった私は、毎日泣き出しそうな空には、本当にうんざりしましたが、それでも時々見せる青空は、どこまでも晴れわたり、そのすがすがしさは、今でも忘れる事が出来ません。その晴れた日には、親方や奥さんが、観光地や、北海道酪農道東事業所などにも見学に連れて行ってくれたり、又町内の相撲大会や運動会にも出場し、実習の他にも、いろいろと経験できたこの夏の日々は、私にとって、いろいろな意味で、とても有意義だったと思います。

別海町実習記

畜産二年 深 沢 科

七月三十一日、東京発釧路行のTDA百三十一便は、曇り空の中を定刻通り飛び上り、午前九時過ぎに、釧路空港へ到着。私は、初めて北海道の土を踏んだのでした。釧路駅へ向うバスの中から、道端に放牧されている牛の群を見、ああ、北海道へ来たんだなと思ったのもつかの間、すぐに交通量の多い道路へと入ってしまいました。釧路駅には、十時半頃到着。ここで、目的地まで一緒に行くことになっているブライオンとパッパラーと関取と落ち合うことになっていたのですが、彼等の姿は見えず、何と、近くのデイリークイーンズの二階から、私の右往左往する姿を見て楽しんでいたのでした。まったく性格の悪い奴等だ。

ところで、我々四人がなぜ遠路はるばるこんな所にやって来たかという、酪農家のもとで実習を行い、それを日頃の学習への肉付けと共に、自己の人間形成に役立てようという、立前上は、まことに高尚な目的の為でした。して、その行き先は、言わずと知れた別海町。「めざせ、西春別。」と、我々一人の好青年と三人の変態少年

は、サッソウと急行ディーゼルへ乗り込んだのでした。列車は、ヨンヤカヤがそよぎ、蛇行する川の流れと、そそり立つ針葉樹林が見えるだけの釧路湿原の中を進み、二時間程で西春別駅に到着。各自、それぞれの受入農家ごとに駅まで迎えに来てもらいました。

私の御世話になったのは、西田勇美さん宅。奥さん、お爺さんお婆さん、娘三人。牛は百数十頭（搾乳牛は六十頭位）と、かなり大きな酪農家。西田さんは、北海道そのまま、大らかで楽しい人でした。

着いたその日の夕方、さっそく搾乳の手伝い。牛舎に行く、厚木農場より一回り大きな牛が、ずらりと並んでお出迎え。すでに男女各一名ずつ実習生がおり、バイブラインミルカーの操作法などを教えてもらい、その後乳ふき。搾乳が終った牛から外に放牧。最後に放牧地の入口にバラ線を張って本日の仕事はおしまい。夕飯では、今日だけだよと言いつつ、歓迎にビールを次々と開けてくれる。歓迎ついでに、今日は、熊まで出沒したようであります。だいぶ酔いが回ったところで部屋に退散。そこへ二番目の娘が御登場。手には恐怖の数学の宿題。ああ、別海町の夜はふけて。

翌日からは、朝は四時半頃起床、五時までには牛舎に行つて飼料をまき、搾乳の準備、牛を牛舎に入れ、搾乳放牧、牛舎の掃除が朝食前の日課。黒々と濡れた目をし

て、人を見つめる牛達は、非常に可愛いと思えるのですが、乳ふきの時など、油断すると蹴られることがあります。性格や、顔付きもそれぞれ違い、意地悪な奴や、人なつこい奴など様々です。育成牛の中に、性格の悪い奴がいて、掃除の時には、必ずそいつとの争いが起こり、ついには、「お前は、掃除よりケンカしている時間の方が長い。」と言われてしまいました。ひと仕事終えた後の朝食、そして搾りたての牛乳の味は、また格別でした。

昼間は、家の回りの草刈りや、薪割り、牧草をサイロにつめ込んだり、放牧地の柵を直したり、牧草地へ草のロールを取りに行ったり。そうかと思えば、仕事と称して、風蓮湖にシジミをとりに行ったり、マタタビの実をとってきて焼酎につけたり、ソフトボールをやったり、と楽しく毎日を過ごしていました。その他にも、釧路、車石、納沙布岬、知床、摩周など道東の観光地にも、ほとんど連れて行っていただきました。

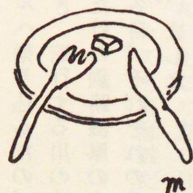
夕方の搾乳、そして夕飯を終ると、親方達は、床についてしまい、部屋に残っているのは、娘三人に女子実習生が二人。(男の実習生が帰って、代りに女子が一人加ったので)思わずニンマリしたのですが、女も五人集まると強く、吊し上げをくったり、かなりさわどい事まで聞かれたりで、こちらは、赤くなったり青くなったり。ある時、ネパールとベンガラデシの農業普及員の方

が研修に来、色々と質問をしてきたのですが、彼等は、語学力が低く、農大英語を十分に理解することができないようでした。ハイ。

実習予定の一カ月が過ぎ「そんじゃ帰りますので。」と言うと、「二番草を手伝って行ってくれ。」と引き止められ、結局残ることになってしまった。九月に入ると毎日トラクターに乗り、牧草地へ出かけて、草刈り、テッタをかけて乾草づくり、集草、ロールペーラでロールづくり。はるか地平線を眺めながら、一日中トラクターに乗っているのは、実に壮快な気分でした。

これらの事を、十九日まで手伝ってきたのですが、五十日間も実習をしていると、自分が、ここにいるという事が、ごく当然の事のように思われ、ここで、ずっとこの仕事を続けるんだという錯覚に陥ってしまいました。

この実習では、今まで学んだ以上の事を身に付けたような気がします。誰かが言った「酪農は、素晴らしく誇り高い、肉体と精神の労働である。」という言葉が思い出されます。



サークルレポート

酪農経営をめざして

牛飼の会

今日、牛乳過剰という、酪農が我国におこって以来初めてともいえる大きな壁に酪農経営農家はぶつかっている。「いったいその原因とは何だろう」という疑問が、「牛飼の会」発足における導火線だった。

現在の酪農経営がどの様な仕組になっているのか知りたい。また、できることなら将来酪農経営に関連する仕事をしたい。以上の様な単純な理由のために、私は友人をさそい酪農経営全般について学び出した。しかし知識が未熟な私達にとって「酪農経営を学ぶ」という大きな課題ではどこから手を付けるべきか苦悩したすえ、基礎的知識の欠除に気がつき、乳牛の泌乳の生理・消化の生理・病気の生理、我国における酪農の歴史、酪農形態、牧草の種類、など基礎的なことから始めた。

ところが、ゼミを聞いてみると、各自が勉強方法について惑い、なかなか最初の予定通り進まずに、行きづまってしまう。やはり、予定は未定であり、決定ではな

かった。結局、基礎のしっかりとしていない計画は、失敗してしまう。

そんなころ、新入会員が入ってきて、創設時のメンバーは、後輩達を指導していかねければならない、という責任を負わされ、また人数が多くなったことによって、混乱状態から、まがりなりにも、会としての形態を保ち、ゼミを開けるようになった。

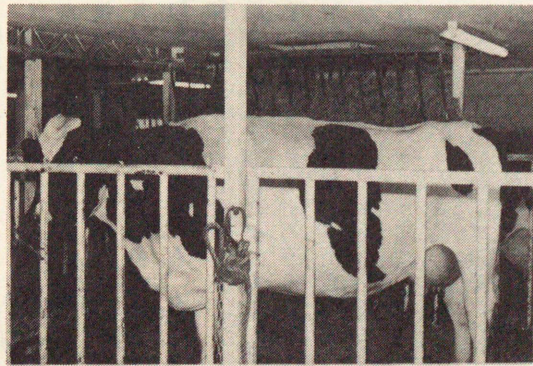
その中で、机上の議論だけでなく、新入生達に乳牛に、それも良い乳牛を見せてやろうと言うことで、会として始めて昨年五月に、長野の茅野牧場という、純粋な酪農家ではないが、ブリーダーをやっている牧場をたずねた。そこには我々が見てもわかるような良い牛がいた。この事は、ゼミの中でいくら議論しても、なかなか理解できないことでも、一度経験してみるだけで理解度が違うし、我々の視野を広げるうえで、大きな収穫だったと言える。

夏休みには、北海道と近郊の酪農家に、それぞれ実習に入り、そして、夏休み明けに、各自が実習先の、飼料給与・経営方法・泌乳量など、調査してきたものを比較した。その中には近郊よりも北海道の方が濃厚飼料を多く給与しているなど、我々も知らない様な事実があったりして、始めての調査にしては、上出来だと思いが、調査件数が少ないために、レポートとしてまとめられなかつ

た。そのうえ、北海道内においても、濃厚飼料の給与量、泌乳量が、大きな地域差があり、近郊酪農と一口にいっても東京の多摩地区と、横浜では、濃厚飼料価格が異なり、全てを画一化して調査した数字は、信憑性に欠くことがわかった。しかし、このように酪農経営は、立地条件、酪農家の経営方法により、大きく異なるという事を知ったことも、我々にとっては、ひとつの進歩であった。前述のように、我々は昨年一年間、机上において、知識を得ることに、酪農家において、作業技術を学ぶことについてやした。一年間のサークル活動の結果は、各自が酪農経営について、より興味を深め、ある程度の知識を身につけたことだ。またそのため酪農という、ひとつの経営形態が頭初に考えていたものより、より深く、広いことがはつきりわかった。実際に酪農経営を行う時には、机上の空論より、牛を飼うといった作業の経験が、より大きな自身となることがわかった。そして何よりも大切な事は、経営にあたっての酪農家自身の思想であると思つた。これは私の独断であるかもしれない。しかし、酪農経営が家族労働である以上、経営者の考え方がその生活に大きな影響を与えているはずである。

今後、我々は、より豊かな知識を得、作業技術を見がき、人間性を高めるよう努力しなければならぬ。といつても、活動内容などについてはまだ暗中模索の状態である。

ある。全会員で、主張をぶつけあう中から、各自何かをみつけ出すと思う。
「牛飼の会」発足二年目をむかえて、活動もよりさんにしなければならぬ。幸い、酪農学園の「乳牛の会」と、接触することができた。今後は連絡を密にし、より以上に活動範囲を広めたいと思う。



ハービストファーム ダウナレインクリスタン
48.10.23 90
♂ローマンドールカウントクリスタンEX93
♀オークノールブヨンドウナレイン 83

詩・随筆

鶏小屋の話

畜産二年 吉川 裕 康

今年は何年なので、なにか鶏の事でも書こうと思つたが、畜産の授業をいかげんに聞いていたバチがあたり鶏で文章は、とても書けそうもなかった。そして苦しまぎれに一つ思いついたのが、子供の頃小学校の庭にあつた鶏小屋の話である。

僕の出た小学校は駅の近くにあり校庭がとても狭く、鉄筋の校舎も黒ずんでおり、とても殺風景な学校だった。その狭い校庭の隅に彩やかな緑色をした三坪ほどの鶏小屋があり、休み時間や放課後になると、いつも数人の子供たちが鶏小屋の中でガヤガヤと騒いでいた。この騒いでいる連中は、動物好きな有志たちの集まりだったが、他の生徒たちからは、「魔の鶏当番」と言われ、とても恐れられていた。なにしろ彼らが校舎前を通ぬと、彼らの前で遊んでいた者たちは、いっせいに道をあけた。彼らのその格好は、まさに当時はやっただ怪獣そのもので、

背中には水がしたり落ちたり落ちるデッキブラシを二本刺し、手には糞だらけのカメの子だわしと給食の残飯、パケツをぶらさげ、髪の毛には、これからあげる天ぷらのように糠をまぶしていた。そして、彼ら鶏当番の道をふさいだ者がいるとすれば、たちまちその子も彼ら同様の格好となつた。

そんな風に他の生徒たちから恐れられていた鶏当番たちも飼育している鶏には、とてもやさしかった。そして鶏小屋は、彼らによつていつもピカピカにされ、餌箱には、毎日近くの八百屋さんから貰ってくる。刻んだ菜葉がきちんと入っていた。

そんなある朝、鶏当番の一人が泣きながら教室に飛びこんで来た。彼は僕の仲の良い友だちで、彼の手にはぐつたりとした鶏がにぎられていた。みんなが息せききつて鶏小屋に駆けつけると、小屋の中は、下が見えないほど羽が散らばっており、昨日まで、走り回っていた鶏たちは、全て息たえていた。どうやら猫のしわざらしかった。生徒たちが鶏小屋の回りに、たくさん集まり金網の中では、鶏当番たちが、ていねいに羽や死骸を集めていた。そして、校庭の隅の桑の木の下には、大きな石に「にわとりのお墓」とマジックで書かれた墓標が作られた。その前を通つた低学年の生徒たちは、意味がわかったのか、それとも高学年のまねをしたのか、「あゝあ、

淋しいおさかな

畜産1年 古 勝 敦

私は おさかな 淋しいおさかな
たとえば青空
たとえば春の陽

カタカタと悲しい風の音が
忘れたように耳をカスめて吹くと
パラソル一輪 ポツンと咲いて
この街は アレ以来
雨なんです
雨が降ってるんです

だから僕は黄色いパラソルとコーモリ傘
別役さんの言っていた通りに
バスを持っているんです

春の傘はソヨソヨ ソヨソヨ……風の中

そう 僕……僕なんですよ
「この風が……」
「この雨が……」
一体 僕が何だって言うんですか？

雨はまるで大きな涙
淋しい おさかなさん
そうだヨネ

「……………」 「……………」

星の街“行き”は最終電車の一本キリ
左手が あって 右手のない淋しい街
そこで住んでた僕の話
ガムもタカも いなくなった街で
僕がヒロッタ小さな話し
僕がヒロッタ淋しいおさかな
たとえば……………コンニチワ
たとえば……………。サヨナラ

にわとり死んじやったね。」とロクにつぶやいていた。
鶏当番は、みんな、しばらくの間しゃぼんとしていた
が、また新しい雛が入ると元気をとりもどした。彼らの
飼う鶏は、育ってゆくにしたがってよび名が、ヒヨコ↓
ニワコ↓ヒヨトリと変わり最後にニワトリとよばれた。

昔の事を思い出した僕は、少し調子にのって都内の小
学校10校の子供たちに協力してもらって、変なアンケート
ト調査を行ってみた。

まず、鶏小屋のある学校は、10校中9校で、そのうち
5㎡以上の小屋がある学校は7校だった。その中で飼育
されている動物は、一、白色レグホン 二、ウサギが最
も多く、その他に小さな鳥やキンケイ、チャボ、コジユ
ケイなどもいた。

次に各校の子供20名に鶏小屋は、人気があるか、ない
か、を質問した所、「ある」が60%、「ない」が40%と
いう答がでた。そして人気がないと答えた子供でも、ひ
よこがかえると人気が出る。とか、鶏小屋が学校の裏で
冬は、寒いから人気がない。といったふうに、条件付の
答が多く、結構、鶏小屋の人気は高いようだった。
さて、みなさんの小学校の鶏は、どうでしたか？

男

ある女に、あなたには人間味があるといわれた、でも
おれに人間らしい心などないよ、あるのは欲望だけ、時
には女を愛し、だきたいと思う、その女以上にいい女が
いれば、その女をだきたいと思う。ライトの下で知り合
い、ベッドで愛し、そして、さよなら、そんなことの繰
返しが、ぼくをかえてしまっ、金もほしい、地位も名
誉もほしい。ただ表面にださなだけで、世間体を気にし
ているから、酒を飲み、有頂天になって、くだらないセ
リフをもっともらしく、くどくどとならべたて、優越感
にひたっているだけだし、でも、こんなおれにも、愛し
た女はいる。人を好きになるのに理由などいらなく、
ただひとこといえるのは、おれにないものを、その女が
あたえてくれたから。

畜産三年 磯 田 芳 男

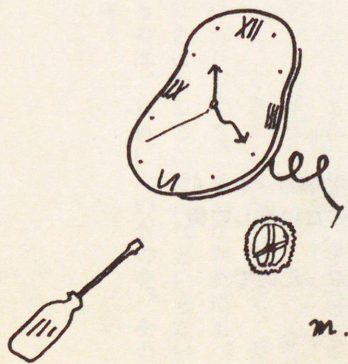
この町に来て雨の日が続く
この町には鉛色の空しかないのかと思う
道の方では子どもたちがさわぎ
沈んだ心にあてつけるようにして
一人でいることがこんなに淋しいなんて
今まで考えたこともなかった

にぎやかなレコードを聞いても
よけい沈んで
くだらない賭事に身を投じてみたりする
だれか私に声をかけてくれ
だれか私の名を読んでくれ

ふるさとのやつらは何をしているんだろう
ふるさとはどうなっているんだろう
以前 考えてみたこともないことを人前でつぶやく
男のくせに……とバカにした顔でなげつける人間達に
は、わからない
悲しいことを悲しいと言って
うれしいことをうれしいと言うことの

できない人たちには私の気持ちはわからない

まだ雨が降っている
この雨は夜になってもやむことはないだろう



優秀卒論紹介

学長賞

牛の雄性生殖器に
関する基礎的研究

— 特に精巢・精巢上体及び陰茎の
性成熟に伴う変化について —

指導教授 一 戸 健 司

畜産学科 家畜繁殖学研究室

本 間 健 郎

一、目的

牛の雄性生殖器系は生殖腺である精巢と、一群の副生
殖腺並びに管、すなわち精巢上体、精のう腺及び前立腺、
さらに外部生殖器である陰茎の三つの部分に分けられて
おり、これら個々の過程においては、その構造と機能に
関する研究は数多く報告されている。しかし若令の生殖
器に関する基礎的報告は少なく、釘本の精巢及び精巢上

体に関する発生学的研究、泉の陰茎の神経分布に関する
組織学的研究など行なわれているが、いずれも各月令の
詳細な点については明らかにされていない。そこで著者
は従来あまり知られていない生後一〜七ヶ月令の若令雄
牛の精巢・精巢上体及び陰茎の発達過程を形態学的並び
に組織学的に明らかにするため当実験を実施した。

二、材料及び方法

- (一) 供試検体は芝浦屠場より入取したホルスタイン種及
びホルスタイン種系牛一〜七ヶ月令の三十個体を実験に
供した。
- (二) 精巢の長径、短径及び重量、次に精巢上体重量、陰
茎においては全長、亀頭部長、亀頭部径、陰茎体部径及
び陰茎根部の長径と短径を測定し各部位の月令に伴う推
移を検討した。
- (三) 精巢及び精巢上体(頭、体、尾)を10%ホルマリン
固定後、常法によりパラフィン切片を作製し、脱パラ後、
ゴモリ鍍銀法を用い染色し鏡検した。
- (四) 陰茎亀頭部、体部及び根部の三位を10%ホルマリ
ン固定後、水洗しコールドトームにより凍結切片を作製
し、アザン染色及びLFB染色を行ない特に髓鞘を中心
とした組織像の観察を行なった。

三、結果

(一) 精巢においてその重量は七ヶ月令より急激に増量するが、その大きさには急激な発育は見られなかった。また月令を問わず右側が大であった。次に精巢上体は徐々に発育する傾向にあり、形態的には一ヶ月令において頭部と体部との間が未発達で以後変化は認められなかった。陰茎においても同様に徐々に発育していくが四ヶ月令より体部の径より亀頭部の径の方が大きくなっており、亀頭部の分離は六〜八ヶ月令で完了するものと考えられた。

(二) 精巢内部は発育に従い精細管の大きさを増し、それに反して間質の支める割合は減少しており、精細管内部は一ヶ月令より精祖細胞は出現していたが、次段階の精母細胞は七ヶ月令においても認められなかった。しかし五ヶ月令より管腔の出現が認められた。

(三) 陰茎亀頭部において陰茎海綿体の筋線維はその集中する部位が一〜二ヶ月令では疎であり、二つに別れているが、四ヶ月令以降では長く一つに結合した状態となり、その分布も月令が進行するに従って密となっていた。次に髓鞘は尿道、尿道海綿体、陰茎海綿体及び白膜を形成している線維の分布と、その分布を同じくし、組織全体に広がっており線維の増加に伴いその分布を広げていた。

(本論文は要約したものである。)

お食事各種 coffee

LOUNGE CASANOVA

カサノバ

世田谷通り
TEL 429-3981

セットサービス有ります。 drink

表1. 各部位の月令別測定値

(±: SE)

月令	個体数	測定値						
		1	2	3	4	5	6	7
精巢(右)	長径(mm)	3.4.3±2.7	4.1.5±5.1	5.1.3	5.2.7±5.4	5.7.9±3.5	6.1.8±3.8	7.2.0±0.9
	短径(mm)	1.6.8±3.4	2.5.4±2.2	2.8.5	3.0.0±4.0	3.0.7±3.0	3.6.1±0.6	4.3.9±5.6
	重量(g)	5.0±1.1	1.1.0±3.7	2.2.8	2.1.3±6.3	2.7.4±5.3	3.4.5±7.8	5.7.7±3.6
精巢(左)	長径(mm)	3.2.9±3.2	3.9.3±4.7	4.5.5	4.9.6±3.7	5.6.0±4.5	6.0.1±3.0	7.0.0±1.6
	短径(mm)	1.6.5±2.6	2.4.4±2.9	2.8.2	2.8.7±4.1	2.9.4±2.4	3.4.2±0.8	4.1.7±7.1
	重量(g)	4.8±0.9	1.0.0±3.6	1.9.2	1.9.3±5.6	2.5.2±5.0	3.3.8±6.0	5.1.8±10.2
精巢上体	右(g)	0.8±0.2	1.6±0.4	3.3	2.5±0.9	3.3±0.2	5.1±2.3	6.1±0.8
	左(g)	0.7±0.2	1.6±0.8	3.1	2.5±0.9	3.3±0.2	4.5±1.5	6.0±0.5
陰茎	全長(mm)	2.6.0±1.5	2.9.8±1.5	3.9.5	3.7.0±4.4	3.7.9±5.4	4.4.5±1.6	4.6.3±1.2
	亀頭長(mm)	3.6.1±3.8	4.0.7±4.6	5.1.1	4.7.0±5.0	4.9.8±2.2	5.4.7±3.4	5.7.7±1.9
	亀頭径(mm)	8.2±1.4	9.7±1.3	1.3.0	1.4.4±4.0	1.5.2±0.6	1.6.9±2.4	1.7.3±1.3
	体部(mm)	9.2±0.6	1.0.5±1.5	8.5	1.1.8±1.3	1.2.8±0.7	1.5.8±3.6	1.6.4±1.5
	根部長径(mm)	1.3.1±1.6	1.3.3±1.5	1.4.6	1.6.3±3.0	1.7.0±1.2	2.0.5±3.0	2.1.0±1.3
	根部短径(mm)	7.5±0.4	8.0±0.6	9.9	9.7±0.1	1.0.0±0.5	1.1.4±2.3	1.2.3±2.6

研究室だより

昭和五十五年
畜産学
卒業論文題目

家畜育種学研究室

今日の家畜は、計画的な遺伝育種に基づき、改良を繰り返して行なわれ、現在に至っている。

家畜育種学研究室では、基礎となる育種学、特に血清学的な見地や細胞遺伝学的、分子遺伝学的な見地から、広範囲にわたり研究活動を行なっている。

当研究室は鈴木正三教授をはじめ田中一栄教授、天野卓講師、黒沢弥悦副手、今井浩副手を中心としたものと、大学院生四名、学部学生 43名で構成され、各自の自覚と、互いの協力により、目標に向かって頑張っております。

研究室の活動の中心となるものは、毎週一回行なわれるセミナーが主体になっております。さらに研究室とは別に大学院生が主になって行っているセミナーにも参加し、問題解決の為に、昼夜を問わずさかんに、討論されております。又、研究活動は、学内だけに止まることはなく、各先生方は、ヨーロッパ、アメリカ、インドネシア、韓国等、海外に出張されたり、学生において

も、海外に調査に行ったり他大学や研究所に出向いて研究を行っております。それに海外から先生をお招きしてセミナーを開催したり致しております。
育種研の主な行事として、毎週一回のセミナー、定期総会、新入室員歓迎会、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。

学籍番号	氏名	論文題名	指導教員
26	岩田 仁	アヒルの血液蛋白・酵素型の電気泳動的分析	鈴木 田中
33	小田原悦子	血液蛋白変異に見られるインドネシア在来牛とホルスタイン種の遺伝的差異	天野
79	佐竹 和子	アヒル血清中の特異蛋白質に関する研究	鈴木
91	指田 尚志	東アジア系在来豚の血液蛋白・酵素型に関する遺伝学的研究	田中
96	柴山 佳子	ホロホロ鳥の産卵性に及ぼす飼育温度の影響	鈴木 平井
101	鈴木 晃	日本産イノシシにおける血液中の蛋白・酵素の多型に関する研究	田中
137	中川 雅裕	山羊の血液型に関する研究I 抗血清の作成と血球抗原の分類	天野

142 永井 淳 綿羊血清中のPostalbumin, Amylase II およびAcid phosphatase の遺伝的変異 田中

178 水田 貞彦 鶏における諸形質の環境変化に対する反応 田中

189 山尾 克廣 日本短角種の血液型ならびに血液蛋白質型に関する研究 天野

221 鈴木 悦子 牧場設計の一構想、特に酪農10ヶ年計画について 鈴木

235 荒木 信枝 牛の品種間における頭骨の比較形態について 田中

241 加賀谷 悟 ウシの赤血球抗原に対する新たな抗血清の単離と同定 天野

家畜衛生学研究室

本研究室は、近江弘明助教授、渡辺忠男講師、鈴木鹿茂美副手各先生の御指導のもとに、四年生三十三名、三年生二十二名、二年生一名、一年生二名、室員一同が一体となって活発なる研究室活動を行っている。

研究活動としては、室員各自希望する家畜、家禽別に分け、牛班、豚班、鶏班、実験動物班の四班に分かれ各家畜、家禽の疾病に対する予防法及び、糞尿処理など家

畜衛生(家畜、家禽の生命を脅かす種々の健康阻害因子を除去し、家畜、家禽の生命の延長をはかり、かつ生産を向上せしめることが、主な目的である。)の立場から独自に追求している。

また、両先生が兼務しておられる本学家畜診療所においても、一般外来動物の診療を中心とした各種の研究活動が行なわれている。

その他研究室の活動内容は、年間行事として新入室員歓迎会、野球大会、収穫祭参加(文化展、模擬店)、親睦旅行、送別会、定例会、セミナーなどがある。

本研究室の大きな特色として、その研究内容は、言うまでもなく、室員各自が室員としての自覚と責任を持ち一人一人がその運営に、大きく貢献していることである。このような、多面活動において学生生活の充実を計り室員各自の個性を引き出し、その個性を持ちより、研究室独自の個性を創造するという事に我々は、目標を置いている。

十二月には、新役員も発足し室員はますますはりきっている。

卒業論文題目	指導教員
3 天野 茂樹 自然動物公園の汚水処理に関する研究	近江 渡辺
6 伊藤 一郎 福島県北地域における酪農の衛生対策について	近江 渡辺

225	金子 史生	犬消化管内寄生虫の發育環に關する研究 特に孵化について	近江 渡辺
224	大嶋 康司	抗コクシジウム剤投与による鶏の血液性状に及ぼす影響	近江 渡辺
208	羽原 宏幸	ジェチルカルバマジン投与犬の一般臨床所見並びに血液性状について	近江 渡辺
207	高橋 正毅	ブドウ球菌の人工感染による鶏体の变化	近江 渡辺
198	横田 千春	牛舎内飛來衛生害虫の分類とその出現時間について	近江 渡辺
196	横内 均		
195	山本 正樹	島根県松江市近郊における肉牛の衛生対策について	近江 渡辺
194	山中 弘	子牛の下痢に対する治療法の検討	近江 渡辺
187	柳原 高広	鶏細胞の保存に影響する諸因子について	近江 渡辺
185	屋代 真彦	ウツド点灯下における非真菌性発光物体の顕微鏡的觀察	近江 渡辺
183	村瀬 正	各種出血に対する止血法の検討	近江 渡辺
182	村上 久芳	ナイアシン(ニコチン酸)のニユールカッスル病抗体産生に及ぼす影響について	近江 渡辺

255	倉邊 雅光	SPF実験動物の衛生対策に關する考察	近江
251	南 俊一		
238	小川 正則	神奈川県厚木市近郊における豚疾病の発生状況について	近江
237	大崎 安夫	豚の衛生対策について	近江 鈴木(伸)
231	丸野 兼俊	羊毛の品質管理並びに鑑定法に關する考察	近江

畜産経営学研究室

当研究室は吉村教授、桜井教授、石岡助手、四年二十三名、三年二十名で構成されています。室員の見掛けの数はかなり多いのですが、実状は幽霊室員を四年十七、十九人、三年二、三人も抱えています。当研究室の最大の特徴は、室員の大半が目的意識もなく集まっている所にあると云えます。「研究室に来て一体何をやるんですか？」某室員の言葉ですが、大半の室員の本心を代弁するものと思います。「朱に交われば赤くなる」。当研究室において、「白鳥」であり続ける事は牧水の心境に達する事かもしれません。唯一の救いは

63	川手 洋造	長野県飯田市における酪農の衛生対策について	近江 渡辺
49	加々美 誠	長野県松本市近郊における酪農の衛生対策について	近江 渡辺
47	岡村 吉彦	静岡県磐田市近郊における酪農の糞尿処理について	近江 萩原
36	大石 良範	ナイアシン(ニコチン酸)投与が鶏の血液性状に及ぼす影響	近江 渡辺
31	内海 敏昭	シエチルカルバマジン投与家兎の一般臨床所見並びに血液性状について	近江 渡辺
30	内山たま美	犬体の細菌叢に關する研究 特に四肢について	近江 渡辺
22	稲 一弘	豚の妊娠時における血液性状について	近江 鈴木(伸)
17	石元 寿賀	甲狀腺摘出犬の一般臨床所見並びに血液性状について	近江 渡辺
16	石原 正康	マイコプラズマ・シノビエの人工感染による鶏体の变化	近江 渡辺
11	飯田 隆夫	豚の妊娠診断に關する研究 プレグトーンの使用	近江 鈴木(伸)
8	伊藤 豊	牛の乳房炎に關する研究 診断法について	近江 渡辺

181	宮本 敦子	実験的腎不全犬の一般臨床所見並びに血液性状について	近江 渡辺
180	宮下 拓優	ヘエの駆除に關する研究 殺虫剤について	近江 渡辺
169	真武 秀行	豚ジラミの駆除に關する研究 殺卵剤について	近江 鈴木(伸)
151	橋本 佳明	家畜の糞尿処理に關する研究 糞生菌の応用	近江 渡辺
141	中山みゆき	自然動物公園内放飼鳥類の外部寄生虫の寄生状況について	近江 渡辺
112	田中 敦子	食塩過剰投与が犬の血液性状に及ぼす影響	近江 渡辺
107	曾我 純一	豚舎内飛來衛生害虫の分類とその出現時間について	近江 鈴木(伸)
102	鈴木加津久	野外における日本カモシカ消化管内寄生虫の寄生状況について	近江 渡辺
90	坂本 哲公	豚舎内の細菌叢に關する研究	近江 渡辺
82	嵯峨 忠志	アルコール不安定乳分泌牛の尿性状について	近江 萩原
78	佐々木高寛	豚体各部における細菌の分布状況	近江 渡辺
76	小松 一則	腐肉法による神奈川県座間市内の昆虫の分布について	近江 渡辺

その「白鳥」が数羽居る事でしょう。

「ある新しい科学的真理が勝ち残るのは、それに同意しない者を説得し、彼らが光を見る事ができる様にする事によってではなく、むしろその同意しない人達が結局は死んでしまい、新しい真理になじんだ新しい世代が成長する事を通してである」(マウス・ブランク)

昭和五十五年十二月現在 四年齊藤

卒業論文題目

2	浅井 英和	牛乳の生産調整における諸問題について	桜井
4	有ヶ谷二郎	静岡県における酪農経営の実態と展望	吉村
12	飯田 文雄	現在の飼料問題と今後の展望	桜井
19	磯 達司	都市近郊酪農の現状と将来性	吉村
24	今井 里水	阿武隈山系における公営牧場について	桜井
42	大野 智	酪農における飼料利用率の向上について	吉村
58	唐沢 秀幸	長野県箕輪町における酪農の経営分析	吉村
60	川音 裕弥	酪農における糞尿処理について	吉村
74	小林 健	長野県箕輪町における酪農の経営設計	桜井
77	木暮 美継	肉牛飼育の経営設計について	桜井

150	波多野裕二	大分県緒方地方における和牛の現状と展望	吉村
157	藤井 省一	養豚経営における糞尿処理の現状と問題点	吉村
159	藤野 洋一	静岡県下における乳牛の糞尿処理について	桜井
160	藤原 俊哉	競走馬の生産および育成について	桜井
162	藤本加寿之	日本酪農における粗飼料自給にみる現状と将来	桜井
202	吉田 泰一	山地開発による酪農の展開	桜井
203	吉田 幸彦	群馬県東村における酪農の経営分析	吉村
206	後藤 秀人	乳雄肥育の経営と経済性について	桜井
214	中村 静男	茨城県西南部における酪農の現状と展望	吉村
217	河内 耕一	肉牛肥育における流通飼料の経営経済性について	桜井
223	齊藤 隆男	酪農経営における財務処理に関する研究	桜井
226	馬橋 和裕	わが国における乳価の構造と安定について	桜井
177	水崎 美考	全開連方式による乳用雄肥育の経営分析	吉村

86	齊藤 康志	アメリカ南部における農業の歴史に関する一考察	桜井
97	城田 道	アルゼンチンのパンパの利用について	桜井
105	鈴木 博英	乳価の形成過程における諸問題について	桜井
106	瀬戸 幸寿	京都府における肉牛の現状と展望	吉村
108	曾根 浩	近代の農学に対する一考察	桜井
110	田代 準	食肉加工業の経営分析	吉村
118	高本 真二	近年における我国の輸入肉流通の現状と展望	吉村
122	竹島 伸佳	林内放牧が林床植生に及ぼす影響	吉村
124	谷本 昭司	有機農業における経営経済性について	桜井
125	丹治 善則	ゴキブリの生態と駆除	吉村
130	寺本 正人	畜産公害の実態とその対策について	桜井
132	外山 豊章	ネズミの生態と駆除	吉村
140	中村 俊己	アマハステビアの窒素施肥及び肥料三要素の効果	桜井
144	長島 浩	服部牧場における経営分析	吉村

227	松枝 和	キジの養殖の現状と発展過程	吉村
-----	------	---------------	----

家畜飼養学研究室

今日我国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安定上の要請からの配合飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境にある。そのような中で飼養学及び飼養研の占める位置は、ますます重要になりつつある。

飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養・管理・飼育という三本柱のもとに杉村敬一郎教授、伊藤澄磨助教授、栗原良雄講師を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行なっている。主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼料作物関係、飼育管理等がある。

研究室行事としては、富士農場に於ける畜産実習、群馬県畜産試験場に於ける家畜管理実習並びに、一般飼料成分々折演習等を行なっている。また室員相互の親睦を計るために、野球大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

現在の室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、大学院生五名、四年生三十二名、三年生二十名である。

卒業論文題目

154	148	147	146	145	135	134	133	123
林 一郎	新実 正幸	南場 政彦	行木 敬一	長野 直通	奈須 清高	鳥海 勝	鳥居 義弘	竹村 孝
副題 生育と一般成分および配糖体の含有量について	主題 大麦の加工方法と飼料価値に関する研究	副題 成産草がアンゴラ兎の育成に及ぼす影響	副題 高速道路のり面利用に関する研究	副題 高速道路のり面利用に関する研究	副題 マイコプラズマ様微生物に罹病したクローバのミノ酸組成	副題 肉豚育成期の成長に及ぼす影響について	副題 岩手県雫石町における酪農の現状と展望	副題 高速道路のり面利用に関する研究
栗原大谷	伊藤(伸)鈴木	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原(伸)鈴木	吉村	栗原藤

209	193	192	188	175	173	167	158
伴野 ヒトミ	山田 裕幸	山崎 宏志	山内 智雄	松沢 祐一	増田 陳順	星 浩康	藤田 常美
副題 マイコプラズマ様微生物(MLO)に罹病したクローバが畜体に及ぼす影響	副題 未妊産豚、経産豚の妊娠前期及び妊娠後期の消化率の比較試験	副題 飼料中の粗繊維の形態及び量が幼豚のエネルギー代謝におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の脂肪酸組成におよぼす影響	副題 飼料中の粗繊維の形態及び量が幼豚の消化率におよぼす影響	副題 飼料中の粗繊維の形態及び量が幼豚の消化率におよぼす影響	副題 マイコプラズマ様微生物(MLO)に罹病したクローバの生育状況、収量及び一般成分	副題 サイレージの好気的変敗に関する研究
栗原	伊藤(伸)鈴木	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原	栗原藤

41	40	37	23	15	13	7
大塚 隆弘	大館 新一	大久保 宏二	井上 公一	石川 久美子	池田 久志	伊藤 達美
副題 経産豚の授乳期の消化率の比較試験	副題 サイレージの好気的変敗に関する研究	副題 サイレージの好気的変敗に関する研究	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が中離期の成長に及ぼす影響	副題 大麦の加工方法と飼料価値に関する研究	副題 蛋白質レベルの相違が幼豚期の成長に及ぼす影響	副題 未妊産豚・経産豚の空胎期及び発情期の消化率の比較試験
栗原大谷	栗原大谷	栗原大谷	栗原藤	栗原(伸)鈴木	栗原藤	栗原(伸)鈴木

111	103	99	87	71	69	61	52	51
田代 雅則	鈴木 潔	周郷 芳一	齊藤 康博	沓掛 暁	岸本 正宏	川上 雅也	加藤 孝	加藤 伸
副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響	副題 飼料中のリノール酸レベルの相違が幼中離期の成長におよぼす影響
杉村	吉村	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤	栗原藤

226	馬橋 和裕	わが国における乳価の構造とそ の安定	桜井
228	伊藤 均	農大富士分場に於けるホワイト ビールの生産と管理について	川島
234	阿武 久幸	鶏の栄養に関する研究	伊藤
245	高下 徹		

家畜生理学研究室

我が研究室は、渡辺誠喜教授・岩崎説雄副手の御指導のもとに、大学院生二名、学部四年次生十一名、三年次生十三名、一年次生一名、計二十七名の室員で構成され、今年度開室四周年を迎えるフレッシュな研究室です。室員は、少人数であるのに対して、実験動物は緬山羊・兎・モルモット・マウス・鶏・ウズラ等多数飼育されており、必然的に動物と接する機会が多く、日常生活を通じて各種動物の生態・生理現象を知ることが出来る恵まれた環境にあります。

本研究室の主要な研究テーマは、(1)家畜家禽の内分必生理に関する研究、(2)家畜家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究、(3)家畜家禽に関する免疫学的ならびに血清学的研究の三本柱を中心に、家畜家禽における生理現象を

幅広く日々、室員全員が協力し合って研究しています。この場合にも、室員が少人数であるという長所が遺憾なく発揮され、アット・ホームな雰囲気の中で先生や諸先輩などから多くの助言や指導が得られ、実験研究を進めていける特権があります。

家畜生理学研究室の年中行事としては、毎週一回もたれるゼミと談話会をはじめ、新入室員歓迎会、学外講師による特別講演会、研修旅行、卒業論文発表と豊富で、これらを通じて、先生を含め大学院生や諸先輩などと活発に話し合え、それぞれの人格形成に好影響が与えられます。また一方では、花の女子室員による手料理を囲んでの多くのコンパもあり、お互いなんの隔たりなく自由な会話が交わされ、時には渡辺教授の美声も聞けるといふ楽しい面も持った研究室です。

卒業論文題目

20	磯田扶美子	マウスに対する免疫調剤投与 の影響	渡辺
59	狩集 富良	緬羊研究の動向と緬羊飼育業 (飼羊業)の将来性特に緬羊の 血液産業について	渡辺
65	神崎 岳人	ウズラの血清IgG値並びに抗体 産生臓器重量に対する性ホルモ ンの影響	渡辺
84	齊藤 悦朗	ウズラの筋及び肝臓における解 糖系酵素の多型に関する研究	渡辺

92	里見 洋司	緬羊の血清IgGの免疫学的定 量に関する研究	渡辺
115	高橋 準	鶏の成長及び血清アルカリ性ホ スファターゼ活性値に対する甲 状腺ホルモンの影響	渡辺
127	塚田 健治	各種動物赤血球の遊離アミノ酸 に関する研究	渡辺
143	長岡 一枝	幼児期における情緒性の発達に 関する研究(小動物との直接 体験が情緒発達に及ぼす影響)	渡辺
153	島中 直樹	鶏の卵白・血清並びに筋肉蛋白 質及び酵素に関する研究	渡辺
164	古沢 亮	ウズラの発育に伴う免疫グロ ブリン(IgG, IgM)と抗 体産生臓器重量の推移	渡辺
199	横山 正敏	アヒル産業の現状と将来性につ いて	渡辺
253	飯田 久善	ミツバチの体液に関する研究	渡辺

家畜繁殖学研究室

当家畜繁殖研究室では、一戸教授、石島助教授、門司助手の指導のもと、大学院生三名、四年生三十五名、三年生三十一名の室員で構成され、室員各自の希望する家

畜・家禽別に分け、牛班・豚班・実験動物班の四班に分かれ、(一)家畜の繁殖生理に関する研究、(二)家畜の人工授精に関する研究、(三)家畜の性現象の人為支配に関する研究とその内容も多種多様に亘っており室員は、各々個々の役割分担のもとに、各動物に愛情をそそぎつつ、日夜真理の追求を行なっております。

研究室では、各自の卒業実験あるいは、来年度の卒論に向けてユニークな発想・独創性に富んだ実験を行っており、先生方には、親切的な御指導をいただいております。また、当研究室においては、研究室のただでなく、広く世界的にも視野を向けており特に近年では、フィリピン・スリランカなど東南アジアにおける水牛及び野鶏の研究が、毎年行われ室員を外地に派遣し、フィリピンにおける人工授精の確立及び在来鶏・野鶏の生理を繁殖学的に究明せんと日夜努力を積み重ねています。

また、各動物別に分れ週一回のゼミナールがあり、文献を読んだの討論、現在注目を集めている報告について、卒論の説明その他幅広く知識を吸収する為に努力しています。

その他、大学生活につきもののコンパは、各々、各自の得意芸に花を咲かす場となっております。そしてコンパの最後は、全員による学歌をもって静かに終るのです。

研究的な立場を基礎に置き、そこに集う学生達の舞台が繁研・家畜繁殖学研究室なのです。

卒業論文題目

1	秋間 責	ベレット法による豚精液の凍結保存に関する研究 凍結および融解の方法について	一戸
10	上原かおる	沖縄県における乳牛及び肉牛の繁殖に関する実態調査	石島
32	浦本 恭明	Prostaglandin F ₂ と投与による Philippine Carabao の発情誘起について	一戸
34	小原 英嗣	白色レグホーン種における血中ステロイドホルモンの年内変動	一戸
38	大沢 政尚	皮膚反射(指圧)による豚の早期妊娠鑑定について	一戸
39	大谷 直志	過排卵処理家兎胚の形態学的研究	石島
46	岡部 道成	家兎の早期妊娠診断に関する研究	石島
48	岡本 明	River Buffalo (Murrah種) と Swamp Buffalo (Philippine Carabao) における精子微細構造の比較検討	一戸
54	門倉 明彦	ハムスター受精卵の外科的移植 特に卵の日齢と子宮日齢との関係	石島
57	亀井 大作	豚精子(低温時)の生存性におよぼすカフェインの影響	一戸
139	中野 克己	岐阜地鶏における性ステロイドホルモンの年変動	一戸
149	根岸 育夫	Philippine Carabao の行動と性周期の関係について	一戸
156	伴 茂和	愛知県大府市に於ける乳牛の繁殖状況について	一戸
163	古川 直哉	牛精子における錠剤化凍結保存法の応用に関する研究	一戸
165	古矢 嘉幸	ホルスタイン種雄牛における精液性状の季節的变化	一戸
166	別府 純一	鶏における下垂体前葉プロラクチンの抽出に関する研究	一戸
171	前田 晋	ラットの胚の非外科的採取に関する研究	石島
172	前田 正直	家兎における未受精卵の凍結保存と体外受精に関する研究	石島
174	松岡 裕之	過剰妊娠マウスの胎児の生存性に関する研究	石島
176	松永 淳		
179	溝口 雅子	豚の性周期における腔粘液結晶像の変化について	一戸
200	吉田久満男	牛未受精卵の凍結保存に関する研究	一戸
204	吉野 真司	ラットの妊娠初期胚におよぼす性腺刺激ホルモンの影響	石島
62	川島 孝雄	牛の雄性生殖器に関する基礎的研究 特に精巢、精巢上体並びに陰茎の性成熟に伴う変化について	一戸
70	久賀 康子	ゴールデンハムスターの反復過排卵に関する研究 特に反復間隔の検討	石島
72	黒田 充	乳牛における分娩後の飼料給与水準が乳量と繁殖状況に及ぼす影響	一戸
88	酒井加代子	マウスの妊娠に及ぼす異種雄臭の影響	石島
94	清水 陸央	カス酪農における供給源の差異に伴う分娩状況について	一戸
95	塩見 学	白色レグホーン種の加齢に伴う血中ステロイドホルモンの変化について	一戸
104	鈴木 隆弘	乳牛の卵胞のう腫における組織学的研究	一戸
109	田口 保雄	スナネズミのスメア観察による発情周期及び交配適期の研究	石島
116	高橋 政克	牛精子のヒアルロニターゼに関する研究	一戸
120	滝沢 悦郎	Philippine Carabao における発情徴候に関する研究	一戸
136	中井 哲夫	牛における性周期に伴う子宮頸管粘液PHの変化と精子受容性に関する研究	一戸
222	宮本 守		石島
254	池田 一彦		

畜産物利用学(肉)研究室

本研究室は、「肉研」と呼ばれ、教授の鬼原新之丞先生、講師の松岡昭善先生、副手の鈴木敏郎先生の御指導のもとに、四年次生二十三名、三年次生二十名、で構成されている。

各人には、学究的態度の保持、研究室に於いては、絶の無い雰囲気醸成することを信条としている。

上級生と下級生の明確な区別はせずに、互いに助け合い睦みく実験、製造実習、問題の解明追究、遊戯に励んでいる。

上級生なるものは、微細にわたっての肉の化学、各種実験方法を教示し、下級生なるものは、卒業論文の手伝い等、実験の潤滑油として活躍している。

問題解決には、昼夜を問わず追求するという室風が、我々の向学心を躍起させる。

また、十二月には新役員も決まり、各人が自覚を持って、研究室の運営にあたっている。

89	83	80	68	67	66	64	50	45	35	14	5
酒井 孝子	斉藤 誠	佐藤 淑夫	杵島 昇一	木藤 和彦	木内 靖	川原 正倫	加藤 俊一	岡田 明夫	大阿久篤士	石井 真也	伊沢 賢治
鶏筋胃の筋肉に関する研究	精製オキエビを混合した畜肉練製品の品質成分について	鶏肉ソーセージに関する研究	鶏肉の凍結保存および解凍の冷蔵時における肉質原線維蛋白質に及ぼす影響	豚肉の凍結保存に関する研究 凍結保存並びに再凍結処理が筋肉脂質に及ぼす影響	牛肉の凍結果程における筋組織構造の変化および肉質に及ぼす影響	紫外線の肉および肉製品に及ぼす影響	鶏肉ソーセージに関する研究	豚肉の塩漬に関する研究 嫌氣的塩漬肉中の亜硝酸根の消長	豚肉の凍結保存に関する研究 凍結保存並びに再凍結処理が筋肉脂質に及ぼす影響	ハム凍結保存の変化に関する研究	屠殺前の温度ストレスがホロホロ鳥の肉質に及ぼす影響
鬼原	鬼原	鬼原	松岡	松岡	鬼原	鬼原	鬼原	松岡	松岡	鬼原	鬼原
	205	201	190	184	168	161	155	119	117	113	98
	渡辺 三晴	吉田 正明	山口 昭	森田 幸子	堀内 貞彦	藤本 明久	原 康子	滝口 一夫	高橋 吉彦	大王 和廣	新貝由弥子
	鶏卵、うずら卵、ホロホロ鳥卵の蛋白質および脂肪の特性に関する研究	屠殺前の温度ストレスがホロホロ鳥の肉質に及ぼす影響	鶏肉における流通過程とその問題点	畜肉および家禽肉の各種調理法の成分組成並びに柔軟性に及ぼす影響について	豚肉の塩漬に関する研究 嫌氣的塩漬肉中の硝酸根および亜硝酸の消長	我国の牛肉および豚肉流通の現状と問題点について	鶏卵、ウズラ卵、アヒル卵の卵白蛋白質の耐熱性制御に関する研究	屠殺前の温度ストレスが鶏の肉に及ぼす影響	屠殺前の温度ストレスが鶏の肉に及ぼす影響	豪州と日本における羊毛の利用法について	ホロホロ鳥の凍結保存中の変化に関する研究
	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	松岡	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原	鬼原

畜産物乳利用学研究室

当研究室では、室長の山中良忠助教授、古川徳講師の両先生より御指導いただき、四年生三名、三年生三名、準室員三名と少数ながらも互いに協力し合い日々研究に励んでいます。

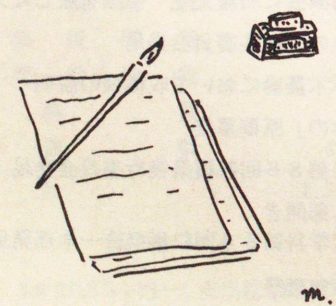
主な活動は乳・乳製品及び、卵、卵製品に関する理化学的、細菌学的研究であり、クリーンベンチ、ガスクロマトグラフィ、分光光度計、原子吸光度計等、数多くの器具完備により、高度な研究を可能にしています。
又、一昨年より、アジアにおける、乳及び、卵の利用法調査を開始し、個々の研究内容がより濃厚なものとなってまいりました。

◎主な行事

- ゼミナール
- 新入室員歓迎会
- 夏期乳製品製造実習
- 収穫祭参加
- 室員旅行
- 卒業論文発表会
- 卒業生送別会

和泉 治本
寺井 健一
佐藤 正夫

チーズ熟成期間中の蛋白質とテクスチャーの変化について
チーズの熟成条件が微生物の生育に及ぼす影響
粉卵製造に関する基礎的研究



昭和55年度畜友会会計報告

収入の部

前年度繰越金	140,043
新入生(173名×8,000円)	1,384,000
転科生(10名×6,000円)	60,000
編入生(7名×4,000円)	28,000
利 息	8,788
	<hr/>
	1,620,831

支出の部

	予算(円)	決算(円)
入学辞退者返還費		8,000
卒業生送別会費	69,910	69,910
卒業生記念品費	75,000	75,000
新入生オリエンテーション費	20,000	20,000
新入生歓迎会費	80,000	82,846
「ふじみの」19号印刷費	304,000	304,000
講演会費	40,000	3,770
スポーツ大会費	120,000	136,895
学科旗ベルト費	50,000	25,000
農場リスト費	5,000	8,425
コンパ援助費	50,000	78,600
収穫祭説明費	30,000	22,500
収穫祭援助費	440,000	455,360
総務費	60,000	65,982
予備費	440,453	0
	<hr/>	
計	1,784,363	1,356,288

(収入総額) 1,620,831円 - (支出総額) 1,356,288円 = 264,543円

上記相違ないことを認めます。

会計監査委員 4年 中野 克己 2年 岩崎 洋一
3年 松本 末広 1年 菅野 泰

畜友会だより

昭和55年度畜友会行事報告

1月10日	昭和55年度畜友会活動開始
1月19日	4年生送別会
3月20日	卒業生記念品贈呈
4月8日	入学式において畜友会の説明
4月18日 ～19日	新入生オリエンテーションにおいて畜友会の説明
4月22日	役員補充(具志堅, 高田, 竹屋)
4月26日	新入生歓迎会(四号館共通実験室)
5月2日	役員補充(阿住, 臂)
5月21日	会計監査委員選出
5月25日	畜友会ソフトボール大会(第1回)
6月～7月	夏期個人農場リスト作成及び紹介
6月11日 ～20日	第10回学内スポーツ大会参加
6月26日	第1回講演会<石島先生 中国を旅して>
7月20日	「ふじみの」編集委員会発足
8月8日	1年生厚木農場において収穫祭の説明
9月下旬～	「ふじみの」原稿募集
9月25日	畜産学科第88回収穫祭実行委員会発足
10月4日	収穫祭本部開き (畜産学科第88回収穫祭統一本部発足)
10月30日 ～11月3日	第88回収穫祭
11月30日	畜友会ソフトボール大会(第2回)
12月1日	昭和55年度畜友会総会(視聴覚ホール)

第88回収穫祭畜産学科会計報告

収入の部	
畜友会よりの援助金	440,000
前夜祭本部よりの援助金	20,000
体育祭本部よりの援助金	45,000
特別企画本部よりの援助金	37,330
収穫祭本部より北門への援助金	150,000
	<hr/>
	692,330

支出の部		予算	援助金	決算
総務費		150,000		152,276
北門			150,000	150,272
前夜祭		20,000	20,000	40,290
体育祭		100,000	45,000	151,435
特別企画		40,000	37,330	78,208
宣伝ストーム		100,000		105,209
文化展		30,000		30,000
		<hr/>	<hr/>	<hr/>
		440,000	252,330	707,690

(収入総額) 692,330円 - (支出総額) 707,690円 = 15,360円(赤字)

※赤字分は畜友会より補助されたい。

上記相違ない事認めます。

4年 中野克己 2年 岩崎洋一
3年 松本末広 1年 菅野泰

第八十八回収穫祭において
上記の成績を納めました

十月三十日の前夜祭に明け、十一月三日の体育祭に幕を閉じた収穫祭。しかし我々畜産学科収穫祭統一本部にとって収穫祭は、なにも前夜祭に始まったわけではありません。十月四日に畜産学科収穫祭本部開きを行い、十月十九日には都内宣伝パレード、十月二十五日には経堂パレードに参加いたしました。昨年はパレードの前日に台風にみまわれ、みこしが崩壊するという事件が起きましたが今年には幸いにして天候に恵まれ、参加者も一年から四年を通じ多数頂き、盛大に終わりました。

前夜祭では、「コマースシャル特集」と題し、一九八〇年に画面をにぎわせたコマースシャルを集め、独自のアレンジによっておもしろおかしく表現し、木曜ロードショーという賞をいただきました。

美人コンテストでは、昨年優勝したという誇りを持って取り組んでいきましたが、今年は惜しくも入賞を逸してしまいました。美人度という点においては、絶対の自信があっただけに、我々のショックは大きなものでした。

野外劇、三十一日に行われた美人コンテストが終つてからは、何とか野外劇は立派なものを作りたいたとスタッフ一同あいている時間をすべて野外劇の為に使い、練習に練習を重ねました。しかし、そんなスタッフの努力は実らず入賞することは出来ませんでした。よし子役を演じた一年の竹尾澄枝さんが主演女優賞を取りました。たとえどんな形の賞であっても我々の努力が認められたということは誠に嬉しい事でありました。

体育祭、昨年度雨で流れた体育祭だけに、今年は何としても成功させたいという願いが報われ近年にない優秀な成績を収めました。競技の部準優勝、櫓装飾の部優勝総合の部準優勝の声が場内に響き渡った時、これ程勝利の喜びを感じた事はなかったでしょう。互いの肩をたたき合う友、うれしさを隠しきれず泣く友、みんなそれぞれ喜びをかみしめていました。又、多くの参加者を頂いた事も私達には大変心強い事でした。一ヶ月に及ぶ準備期間、夜の寒い中、ドラムカンの火を囲んで作業した事、酒をかわしながら語り合い、騒いだ事、家に帰らずカーテンにくるまって寝た事、私達にとってそれら総てが収穫祭でした。つらくとも精一杯やった充実感でいっぱいでした。来年もそんな収穫祭である事を望みます。

第八十八回収穫祭

前夜祭

「コマージュル特集」木曜ロード賞
 構成 柳井篤司 二年
 キャスト 加藤新悦 三年
 阿住進 一年
 具志堅興律 一年
 宋戸寿 一年

美人コンテスト

「お姫様の大冒険」

脚本 加藤新悦 三年
 構成 宮入淳 二年
 キャスト 菅野泰 一年
 シンデレラ 菅野吉浩 一年
 女の子 柳井篤司 二年
 おじいさん 遠藤正雄 二年
 おばあさん 加藤新悦 三年
 ドンキホーテ 鳥居昭子 二年
 小人 細川京子 二年
 “ ” 松尾由起子 一年
 “ ” 具志堅興律 一年
 赤鬼 阿住進 一年
 青鬼 阿住進 一年

野外劇

「明日に向かって旅立て」

脚本 宮入淳 二年
 構成 柳井篤司 二年
 キャスト 柳井篤司 二年
 正一 柳井篤司 二年
 好子 竹尾澄枝 一年
 雄三 倉橋正己 二年
 年雄 中沢真一郎 二年
 浩美 高田肖子 一年
 配達人 阿住進 一年
 ロボット 具志堅興律 一年
 通行人 加藤新悦 三年

体育祭

総合 準優勝

バックボード「帆船」 優勝
 設計 倉橋正己 二年
 製作 阿住進 一年
 競技 宋戸寿 一年
 準優勝 農大競馬
 各科対抗リレー(男子)
 (女子) A 準優勝
 (女子) B 優勝
 仮装行列 第三位

昭和五十五年度第八八回収穫祭
 畜産学科統一本部役員

○統 一 委員長 萩野朋美 三年
 副委員長 加藤新悦 三年
 副委員長 柳井篤司 二年
 ○宣伝ストーム統一委員長 遠藤正雄 二年
 ○前夜祭統一委員長 柳井篤司 二年
 副委員長 具志堅興律 一年
 ○特別企画統一委員長 宮入淳 二年
 ○体育祭統一委員長 倉橋正己 二年
 副委員長 阿住進 一年
 ○北門アーチ統一委員長 吉田敏之 二年
 副委員長 若月一男 二年
 ○文展模擬店統一委員長 小椋勇人 三年
 ○会 計 臂吉浩 一年
 ○家畜苑統一委員長 橋本彰人 三年

昭和五十五年度畜友会役員

委員長 小椋勇人 三年 (衛生研)
 副委員長 橋本彰人 三年 (飼養研)
 副委員長 倉橋正己 二年 (育種研)
 會計補佐 加藤新悦 三年 (衛生研)
 企 画 宮入淳 二年 (衛生研)
 企 画 柳井篤司 二年 (衛生研)
 企 画 具志堅興律 一年 (衛生研)
 書 記 高田肖子 一年 (衛生研)
 書 記 竹尾澄枝 一年 (衛生研)
 渉 外 萩野美枝 一年 (衛生研)
 渉 外 遠藤正雄 二年 (衛生研)
 庶 務 臂吉浩 一年 (衛生研)
 庶 務 阿住進 一年 (衛生研)
 會計監査 中野克己 四年
 會計監査 松本末広 三年
 會計監査 岩崎洋一 二年
 會計監査 菅野泰 一年

東京農業大学畜産学科 “畜友会”規則

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会と称す。
- 第二条 本会は東京農業大学在學生、教職員、及び卒業生をもつて、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会員

- 第四条 本会の会員は左記の三種をもつて組織する。
- 一、正会員
二、特別会員
三、名誉会員
- 正会員は東京農業大学畜産学科在學生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。
- 第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

- 第六条 本会は左記の役員をおく。
- 一、委員長一名、副委員長二名、書記二名、会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
- 二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名
- 三、監査員四名
- 第七条 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 第八条 一、委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画、庶務は選挙によつて、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。
- 二、第六条第二項、第三項に定められた役員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
- (なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。)
- 三、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならぬ。
- 第九条 役員任期は原則として一年とする。
- 第十条 総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。
- 第十一条 一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印(拇印を含む)を必要とし、議長に一任する。

三、委員状は総会に際し定足数に含まれる。

但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。

四、委任状の検査は役員が行なう。

五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもつて追加し即日効力を発する。

第十二条 定期総会は年一回十一月に召集する。

臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

二、役員名の三分の二以上が必要と認められたとき、総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条 総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によつて議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章 業務

- 第十七条 第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。
- 第十八条 本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。
- 第十九条 本会は左記の業務を行なう。
- 一、会員親睦会
- 二、講習会及び研究発表会
- 三、見学調査
- 四、機関紙の発行
- 五、その他第二条に附帯する業務

第五章 会計

- 第二十条 会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。
- 第二十一条 本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。
- 第二十二条 納入金の払い戻しは行なわない。
- 第二十三条 但し入学取消しの場合はその限りではない。決算報告は十月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

第六章 監 査
第二十四条 本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条 監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。
監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条 監査委員は第六条第一項、第二項の役員に兼任は出来ない。

第七章 附 則

第二十七条 本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。

第二十八条 本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

畜友会選挙規定

第一章 総 則

第一条 この規定は、畜友会役員選挙に關し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。

第二条 この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員選挙に適用される。

第二章 選挙管理委員会

第三条 第一条の目的を達するために、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。(以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。)

第四条 本会は、畜友会役員選出に關して全ての権限を有する。

第五条 本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互選する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。

第六条 本会の委員の任期は原則として、畜友会の

第七条 事業年度に準ずるものとする。
本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならぬ。

第八条 畜友会規定第十六条によつて、畜友会役員に不信任を審査し、成立した場合に、本会は新たに役員選挙を行なう。

第三章 選 挙

第九条 選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十条 一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。
二、畜友会役員の不信任が成立した場合に、二週間以内に選挙を行なう。

選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならぬ。

第十一条 選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十二条 選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十三条 選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十四条 選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣伝の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五条 投票に關しては左記の規定に基づいて行なう。

(イ) 投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。

(ロ) 投票は選挙管理委員会が定める用紙により行なう。

(ハ) 代理投票及び不在者投票は認めない。

(ニ) 投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。

(ホ) 投票場は選挙管理委員会が定める。

(ヘ) 開票は全投票終了後、ただちに行なう。

開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

左記の投票は無効とする。

(イ) 正規の投票用紙を用いていないもの。

(ロ) 立候補者以外の氏名を記入しているもの。

(ハ) 選挙管理委員会が不明と認めたもの。

畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第二十条 当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一条 立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

第二十二条 選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならない。

第二十三条 選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四条 選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があつてもこれに応じなければならない。

第四章 予算及び監査

第二十五条 畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六条 選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章 改正

第二十七条 本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八条 本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九条 本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

編集後記

最初に「ふじみの」が発行されて今年でちょうど20年になります。つまり人間で言えば成人式を迎えた訳です。

私達編集委員一同は、この20号という記念号が、皆様方に御満足頂ける様あれこれと企画を練り編集致しましたが、その成果が誌面に現われているでしょうか。

今年は嬉しいことに各方面より多数原稿を頂くことができ、内容豊富に記念号を発刊することができました。

なお、原稿を頂いた学内、学外の諸氏、諸先輩に感謝するとともに、今後とも「ふじみの」及び畜友会への皆様のより一層の御協力をお願い致します。

編集委員一同

編集部では「ふじみの」第二十一号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとす為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願い致します。

記

募集期間 五十六年九月～十一月下旬

要項 ○論文、随筆、紀行文、主張

四〇〇字詰、十枚以内

○写真カット、は随意

○表紙図案、三色以内

宛名 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学畜産学科内

畜友会

ふじみの編集委員会行

発行日 昭和五十七年一月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会「ふじみの」

編集委員会

TEL (四二〇) 二二二一(呼)

昭和56年3月 1日発行

“ふじみの” 第20号

編集責任者 岩崎浩一

発行者 小椋勇人

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学畜友会

電話(420)2131(呼)

世田谷区経堂1-6-13

印刷所 エルデ・タイプ社

電話(429)1067

建築金物, 日曜大工用品
各種塗料, 砂利, 砂, 園芸用品
セメント, コンクリート製品 etc

稲毛屋商会

世田谷通り拓銀隣り TEL 426-0505~6
工場 TEL 420-1913

鳥肉専門店 株式会社 藤木商店

代表取締役 藤木三代治
本店 東京都世田谷区世田谷2-28-19
TEL (429) 8131 (代)-3番

世田谷名物
チキンバーベキューセンター
大小宴会、ご家族連れ、ご会合に

直営店

藤ふじ さくら

バス停・世田谷通りたくぎん前・松ヶ丘交番前下車
TEL (427) 3221 (代)-3番 駐車場完備

住宅相談所

一般建築材・サッシ・日曜大工用品一式

(有) 丸美木材

代表者 深美博之

世田谷区桜2-15-16 TEL428-0521

(有) 神仙湯

世田谷区桜2-15-16 TEL420-3726
ミナソ

チャンス / 経堂でロシア語が学べる

入門から専門クラスまで各コース自由に選べます。

短期講座	昼間部	月・木	13:30~15:20
	"	土	10:00~12:20
	"	日	13:00~16:50
夜間部	火・金	18:30~20:20	

集中講座 春期 3月中旬2週間 夏期 7月中旬3週間

通信講座 入学随時

▲ 本科 昼間部 3年 夜間部 2年 ▲ ロシア語 夏期大学 8月初

学則 300円

〒156 世田谷区経堂1-11-2
経堂駅3分 ☎ 425-4011

ロシア語
専修学校

日ソ学院

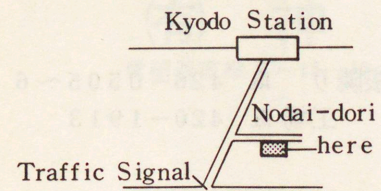
Kitty: Have you been to SAUSALITO?

Betty: SAUSALITO? What kind of place is it?

Kitty: You don't know? Haven't you been there? It's a very nice place. There are many interesting food & drinks, and they all taste delicious, and music flows out of JBL!

Betty: Really? I've been missing out on something good. I must go there. Let's all go there together!

Congratulations on entering the Tokyo University of Agriculture.

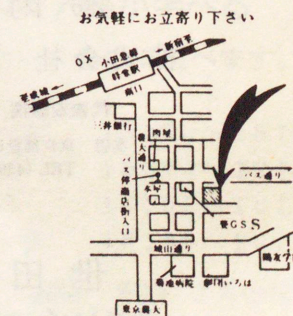


Sausalito

1-4-12 Kyodo

AM 0:00~PM 0:00

Champion チャンピオンウェア
PUMA. プーマウェア
YONEX バドミントンテニスラケット
ZETU ゼットウェア
CONVERSE コンバースウェア
TIGER. オニッカシューズ



スポーツ品の店

ゼウス

〒156 東京都世田谷区経堂1-7-6 TEL 428-4587

